

平成29年度（2017年度）

平成29年度ユニバーシアード強化研究会
（第63回指導者会議）

報 告 書



2018年（平成30年）3月

公益社団法人日本学生陸上競技連合

I. はじめに、開会挨拶、提案趣旨	3
II. 第1部 ユニバ競技大会台北2017の検証—競技成績とその周辺（コーチら）など—	5
1. 演者らの紹介、研究会のねらいと進め方	
2. 競技成績とキーワード	
1) 総括・・・「アベレージ」「対応力」	
2) 短距離・ハードル部・・・「実力発揮」	
3) 中・長距離部・・・「至上命令」	
4) 跳躍部・・・「事前調査」「シーズンベスト」	
5) 投てき部・・・「安定性」	
3. JOCとの派遣数に関する折衝	
4. ユニバ大会前のJISS集合	
5. 競技場等の事前情報（情報収集と受け渡し）	
6. アベレージ/安定性（その2：掘り下げ）	
7. リレー種目と長距離種目の好成績の秘訣	
III. 第2部 ユニバ競技大会ナポリ2019に向けた今後の課題—今後の強化のために何をすべきか—	11
1. ユニバ大会前の合宿とその意義・理由	
1) 中・長距離部	
2) 投てき部	
3) 跳躍部	
4) 短距離・ハードル部	
2. 代表選手のアンケート（回収率、内容、今後の在り方）	
3. 会場との質疑応答（その1）	
1) 質問1 ユニバ大会とU18・U20・シニア大会の関係	
2) 質問2 海外遠征での安心材料	
3) 質問3 ユニバ大会の競技運営	
4) 質問4 九州学連の長距離強化のヒント	
5) 質問5 地区学連の海外遠征	
4. コーチからみた選手の評価（想定と実際）	
5. コーチ情報の伝達（内容と方法）	
6. スタッフの引継ぎ（全体の責任者、スタッフ、JOC派遣者）	
7. パーソナルコーチとの連携	
8. 次回ナポリ大会2019の選考日程	
9. 会場との質疑応答（その2）	
1) 質問6 跳躍と投てき（1～3ラウンドと4～6ラウンド）の戦い方と指導方法	
2) 質問7 実力近くの挑戦に伴う緊張のほぐし方と指導方法	
IV. まとめにかえて、閉会挨拶	17
V. 資料編	18
資料1 しおり（テーマ、趣旨、プログラム、演者ら）	
資料2 研究枠組み（イメージ図）	
資料3 JOC報告書（要旨：2011, 2013, 2015, 2017）	
資料4 選考基本方針等の推移（2011, 2013, 2015, 2017）	
資料5 競技結果（2011, 2013, 2015, 2017）	
資料6 代表選手に対するアンケート結果（まとめ）	
資料7 代表役員に対するアンケート結果（まとめ）	
資料8 平成29年度ユニバーシアード強化研究会の開催要項	
資料9 平成29年度指導者会議運営委員会	
資料10 平成29年度指導者会議運営委員会の開催報告	
資料11 平成29年度ユニバーシアード強化研究会の打ち合わせ	

平成29年度ユニバーシアード強化研究会（第63回指導者会議）

報告書

ユニバーシアード競技大会台北2017の検証と今後の課題 —次回ユニバーシアード競技大会2019に向けて—

公益社団法人日本学生陸上競技連合

I. はじめに、開会挨拶、提案趣旨

<はじめに>

「平成29年度ユニバーシアード強化研究会（以下、『ユニバ強化研究会』と略す）」（第63回指導者会議）が2018年3月3日（土）に中央大学駿河台記念館で開催された。テーマは「ユニバーシアード競技大会台北2017の検証と今後の課題—次回ユニバーシアード競技大会2019に向けて—」であった。ユニバ強化研究会は学連の独自性の1つであるユニバーシアード競技大会で学生アスリートのメダル獲得に関する研究組織であり、その目的は中長期的な視点に立ったユニバーシアード競技大会に関する基本構想案（注：次世代の指導者育成等も含むビジョンや仕組み等）の策定も視野に入れながら、ユニバーシアード競技大会台北2017の検証を行って、次回大会ナポリ2019に向けた今後の課題を明らかにすることにあつた。

研究の基本的枠組みはスポーツ経営学的方法を参考にした。各演者は検証の視点（選手選考基準、成績、条件）と資料（選手選考基準、JOC報告書、競技成績、代表役員アンケート等）等を基にして検証と今後の課題について発言した。

研究会では選手選考などの全アイテムを検証する時間等が無いために、とりわけ台北2017における大会前と大会中の現場（監督・コーチらとして選手に密着して助言・指導等を行った実績：何ができて何ができなかったか等）に焦点を置き、「第1部 検証：競技成績とその周辺（コーチらなど）（45分）」と「第2部 今後の課題：今後の強化のために何をすべきか」の2本柱で構成された。進行はフロアの人も含めて活発な意見交換の場になるように努めた。第1部のテーマに対

する回答については各演者がキーワードをスケッチブックに記入して説明する方法で、また会場からの質問に対しては演者らが直接回答する方法で行われた。

本報告書は研究会（90分）で論議された内容を要約したものである。尚、会場で配布された各種資料は資料編をご参照ください。

<開会挨拶> （以下：敬称略）

司会 司会を務めます日本学生陸上競技連合、総務委員長・指導者会議運営委員の障子と申します。では始めに日本学生陸上競技連合の松本正之会長からご挨拶をいただきます。

松本 私の学生時代は、ユニバーシアード競技大会（以下、「ユニバ大会」と略す）に出場している選手は、学生時代しか出られないオリンピックであつて、あこがれの的でした。そしてオリンピックと同じくらいの価値があつて、「栄光」と見ていました。

昨年、台北に行きました。日本代表（学生）がユニバ大会台北2017に参加し、金メダル7個を含むメダル16個の成果でした。しかも国別では世界最多（参加国中）でした。満足しています。

地元・台湾の盛り上がり方はテレビも含めてすごく盛り上がっていました。それを受けて、やり投やリレー種目などは絶叫に近い盛り上がりで、ある意味うらやましかったです。やり投については外国の有名コーチを招聘して徹底的に鍛えたと聞きました。一生懸命にエネルギーを投入していることを強く感じました。

日本に帰ってからユニバ大会の成績を話しても

ほとんどの人が知らなかったです。報道等も台湾と違いました。もっと日本でも認識してエネルギーを高めた方がいいのではないかと思います。

ユニバ強化研究会を通じて選手のさらなる強化内容が明らかになれば、学生しか参加できないユニバ大会についての議論がより深まると思います。そしてその強化内容が公益法人としての日本学連の向上と進展という目的に資することを期待したい。

<提案趣旨>

司会 次に研究会の提案趣旨については、阿保雅行、指導者会議運営委員長、お願いいたします。

阿保 お手元の「しおり（資料1）」をご覧ください。過去3年は「日本学生陸上フォーラム」の名称で討論が行われ、成果として多くの課題やそのヒントなどを得ることができました。

本年度は、日本学連の独自性や強化委員会の役割・任務という視点から演者へのヒアリング等を行い、「平成29年度ユニバーシアード研究会」を立ち上げました。

研究会の目的は、台北2017の検証を行って、次回大会ナポリ2019に向けた課題を明らかにすることにあります。

資料2枚目の図は本テーマに関する研究枠組み（イメージ）です。縦軸方向は検証の視点、横軸方向は時間軸で、過去4回のユニバ大会、次回大会ナポリ2019、東京五輪2020等の大会です。そして3枚目以降は各種の資料です。

本研究会では資料に記載された全アイテムについて討論する時間がないので、演者の皆さんには、とりわけ台北2019に関わる現場とその周辺に関する話を中心にして戴きます。そして会場の皆さんとも意見交換をしてナポリ2019に向けた課題を明らかにしていきたいと思っております。

II. 第1部 ユニバーシアード競技大会台北2017の検証 —競技成績とその周辺（コーチら）など—

演者（順不同）

（総轄）栗山佳也氏（大阪体育大学、学生連合：常任理事・強化委員長）
安井年文氏（青山学院大学、学生連合：強化委員会、短距離・ハードル部）
米田勝朗氏（名城大学、学生連合：強化委員会委員、中・長距離部）
森長正樹氏（日本大学、学生連合：強化委員会委員、跳躍部）
岡田雅次氏（国士舘大学、学生連合：強化委員会部長、投てき部）

コーディネーター

船原 勝英氏（共同通信社、学生連合：指導者会議運営委員）

司会 障子 恵氏（跡見学園女子大学、学生連合：総務委員長・指導者会議運営委員）

第1部は、「ユニバーシアード競技大会台北2017—競技成績とその周辺（コーチら）など—」の検証であった（45分）。演者5名（栗山佳也氏、安井年文氏、米田勝朗氏、森長正樹氏、岡田雅次氏）が船原氏のコーディネートによってさまざまな意見を交わした。特に各演者は競技成績に関わるキーワードを掲示して説明を行った。また会場との質疑応答もあった。その模様を一部要約して報告する。

1. 演者らの紹介、研究会のねらいと進め方

司会 本日は2部構成になっております。第1部は「競技成績とその周辺（コーチら）など」、第2部は「今後の強化のために何をすべきか」となっております。（途中休憩を挟ませていただきますが、ご質問等がある方は、第1部の後に用紙を用意しますので、ご記入後、受付まで提出してください）。演者とコーディネーターの紹介を順に行った。

船原 進行役を務めます船原です。先ほど会長から台北の報告がありました。1967年の東京ユニバーシアードを観戦して大変感動した覚えがあります。この大会では澤木先生が5kmと1万mの2冠を獲得され、永井立子さんも代表として活躍されました。私は高校生2年生で大阪から東京に来て観戦し感激しました。会長はネビオロさんでした。ユニバ大会も紆余曲折がありましたが、レベルダウンしたりまた上がったりしました。今年、国際陸連がポイント制を新設することでユニバの

位置づけがかなり高くなったという話もあります。これについても報告していただければと思っています。

学生はユニバを足場として世界選手権やオリンピックに出られるようにしてほしい。そのためにはユニバ大会台北2017をしっかりと検証して、何が良くて何が悪かったかを見極める必要があると思う。そういう観点から今日は進めていきたい。

但し、時間の節約のために、皆さんにお渡ししているスケッチブックにキーワードを書いてもらって、できるだけ簡潔に報告していただきます。先ほど障子さんから要請がありましたように、第1部が終わったところで、会場の皆さんから質問／テーマを出していただきます。そのテーマも第2部に加えたいと思います。基本的には、演者の皆さんにヒアリングをした段階で「事前の顔合わせ」とか、「情報交換」が今回のチームの好成績につながっていたと聞いております。第2部はこれを中心テーマにしますが、会場からのテーマもまじえて第2部を進めていきたい。では、早速報告をしていただきます。

2. 競技成績とキーワード

演者は自分が担当する部署の競技成績を報告するとともに競技成績に影響すると考えるキーワードを呈示して説明を行った。

1) 総轄・・・「アベレージ」「対応力」

栗山 台北大会2017は、光州大会2015に続いてチームリーダーとして責任ある立場で行かせていただきました。台北大会を振り返りますと、日本に

すればアジア地区の有利性があるが、近いからこそで気を緩めてしまうというところもあったかもしれない。

結果論でいうと競技成績は過去最高、またメダル数は参加国中最多でした。このことから言うと成功だった。ただ代表選手の記録面や個々の持っている実力に照らしてみると、本大会でパフォーマンスをどれだけ出せたかを考えると疑問に残る点が何カ所かあります。

私が挙げた一つ目のキーワードは、本人が持っている力の「アベレージ」です。大きな大会になればなるほどアベレージがより高く、そしてコンスタントに力が発揮できる競技力、これが国際試合で大きくものを言うのではないか。国内のある大会ではいい結果が出るが、特に2、3ラウンドと重なってくると記録のばらつきが非常に大きくなってパフォーマンスを出せない、特に外国に行くと途端に実力を出せないという選手が多々おります。アジアでもそういう場所で安定した力を持っている選手は、それなりの結果を残したのではないかと思います。

二つ目のキーワードは「対応力」です。どういう状況であってもその場その場で自分が何をすべきか、どういうふうに自分のコンディションを上げていくか。そして言葉や食事の問題。これらに対する基本的対応力の優れている者ほどアベレージにもつながっていくと思う。対応力は短い時間では作れるものでない。長年、その選手が陸上競技などのスポーツ、そして日常生活から作り上げてきたものが最終的に自分の目指すパフォーマンスにつながっているのではないか。

2) 短距離・ハードル部・・・「実力発揮」

安井 今回、総務と短距離ハードルのお世話をする立場で行きました。先ほど栗山先生から全体についてのお話がありましたので、私は短距離、ハードル、リレーに絞って話したい。

キーワードは「実力発揮」です。お手元に3枚の資料を配布しました。まず「入賞率」を見てください。入賞者が出場者のどれくらいなのか。リレーは男女とも優勝と銅メダルで入賞率100%。男子ハードルは、110mHは2人出て4位と5位でした。メダルと僅差で、結果として目立たなかったがよい結果を残した。それに次ぐのが男子の100m、200m。どちらも2人のうち1人は入賞しました。昨年ブレイクした多田君が優勝するかと思って行ったが、決勝では疲労から7位でした。全

体では33%。出場した選手の3割くらいしか入賞できていない。これだけに絞ると見えないものと見えるものがありますので、次に「**競技結果達成率**」を見てください。「パフォーマンスの達成率」の評価として自己ベストの98%出せていれば評価できる、という筑波大の村木先生らの評価基準です。これによると男子は78%が98%以上を達成しました。女子は1人（立命館）だけ98%超えでした。こういう形で見ると男子78%、女子はリレーを含めて40%でした。いかにその場で実力を発揮することが大変だったかがわかります。今回は移動時間や時差は日本とほとんど変わらないので、日本にアドバンテージが比較的ある場所だったと思いますが、こういう数字を見るとまだ改善の余地があります。全体（男女合計）では64%でした。特に男子は非常にいい力を発揮してくれました。今後につながる部分かと思います。

女子選手は経験値が少なく、100m、200mの後にリレーがありました。100m、200mの後に少し場慣れをして、リレーは頑張れるぞ、とスタッフや関係者がもっていってくれました。そういう実力発揮がリレーではできました。100%超えは女子のリレーのみです。女子は最後の最後に実力を発揮してくれました。そこにヒントがあるので。今回のユニバは結果が良かったという見方はできますが、実際は玉石混交であったと思う。今後は色分けをして精査しながら強化を図ればよいと思う。

3) 中・長距離部・・・「至上命令」

米田 長距離ブロックはユニバ代表が全員出そろったところで、7月にJISSに全員集合し、私と大後先生（神奈川大）、酒井先生（東洋大）が一緒になって選手に次のことを話しました。①ユニバでは一つでも多くのメダルを獲得することが「至上命令」です。②大会までの1カ月間で自分自身のピーキングをしっかりと作ってください。③大会に臨むにあたっては一つでも順位を上げる気概を持って、また日本代表としてユニバに参加してほしいと言いました。

結果については配布資料の「長距離・競歩ブロック成績一覧」をご覧ください。非常によく頑張ってくれました。出場した種目に対して、長距離ブロックは金メダル獲得率が57%でした。男子が3種目に、女子が4種目（ハーフ・団体を含めて）にエントリーしました。男子の金メダルは4個でした。長距離ブロックだけで言うと出場選手

の50%がメダルを獲得しました。出場選手のうち入賞率は72%でした。長距離にとっては大変厳しいコンディションの中でのレースでした。若干体調を崩した選手もありましたが、それぞれの選手がベスト・パフォーマンスを発揮して成績に繋げてくれたと思っております。ただトラックの5000m、10000mについては海外選手と対等に戦う力がない。沢木副会長からもレース後にご指摘を受けました。レース中の「駆け引き」についてです。特に女子10000mにおいて棟久さん（東農大）はスタートから積極的にレースを引っ張りましたが、最終的には海外の選手にラストスパートで負けてしまいました。ただ引っ張るだけではない。どのタイミングで前に出るか、または一度後ろに下がって様子をうかがうとか、レース中に臨機応変の戦い方を身につけていかなければいけないと思っています。

今回はロシア選手が出場していなかったのですがこのような好結果につながったとも思いますが、次はイタリア開催なので欧州のトラック種目の強い選手がたくさんエントリーしてくると考えられます。次回大会までに今回の反省を長距離全体で共有し、結果につなげていきたい。

4) 跳躍部・・・「事前調査」「シーズンベスト」

森長 今大会では、私はチームに帯同する立場ではありませんでしたので、詳細はわからない点があります。跳躍種目は山本選手がメダルを獲得したのでよかったです。棒高は江島が5m40で4位。十分にメダルを獲得できる内容でした。よくがんばったと思う。走幅の山川選手は7m53で予選落ち。これは結果が悪いのでまだまだ改善の余地があると感じている。

私のキーワードは「事前調査」と「シーズンベスト」の二つです。特に跳躍種目は感覚の部分が大切になります。感覚というのは選手自身、もしくはその他のコンディションが非常に大きく影響します。メンタル、天候、サーフェイス（素材）、戦術・戦略。ある程度きちっと作戦を立てて臨んでいかないと結果を出すのは難しい種目です。こういうものに影響を与えるのが「事前調査」であり、きちっとできていたかどうかが重要であると思う。私が関係する選手が2人いましたが、事前にサーフェイス情報が得られていませんでした。また天候の変化が挙げられます。中でも江島選手は予選の急な雨で事前準備が十分にできていませんでした。山川、江島とも、サーフェイスの軟ら

かい素材の影響のために、事前調整から筋力を使ってしまい、少しけいれんがありました。「シーズンベスト」は、こういった細かい感覚に影響してくることも含めて、そのシーズンにベストを出している選手は勢いがあります。そういう選手は細かい影響を受けにくいというのが私の経験からも多くあります。特に今季、山本選手は春先からいい調子を続けています。本人と話した中ではあまりこういうことの影響を受けにくい、あまり感じないと言いました。こういう「勢いのある選手」が結果を出したのではないかと感じます。江島選手もシーズンにベストを何度か更新していました。全体的には大きなミスが無かったと思う。

5) 投てき部・・・「安定性」

岡田 私の発表は最後でしたので、キーワードは栗山先生、話の内容は森長先生とほぼ一緒でしたので少し驚いている。ユニバ大会は、学生しか出られないので、4年間の中で最も高い位置づけにしている。今回の大会には私どもの学生が2人参加しました。事前に大会の特徴を話しており、そういう心構えで大会に臨みました。

選考では投てき種目から5人が選ばれました。ハンマーは1名、やり投げは男女各2名。投てき種目は国外に出ると戦えないと言われていて、選んでいただくことは難しい。必ず勝たなければいけないということからこの人数になった。

キーワードは、栗山先生が「アベレージ」でしたが、私は「安定性」です。心、技術、その他。一発屋ではだめです。今後はオリンピックも世界陸上もポイント制になるので、ポーンと出た一発の記録では出られません。やはり安定性が重要になります。安定性とは、心もそうですが、経験ということで収まってしまうかもしれません。アンケート結果（代表選手）をみると、「初めての海外の試合で」とか、「こんないい所に泊まって」とかの回答が目につきました。修学旅行じゃないのに、と言いたくなる。そういう経験は慣れということかも知れないが、ちょっとウーンと思う。勝負をするために大会に来たはずなのだと思うからです。

技術について：やり投げでは男女4名が参加した。地面については、走るグラウンドと走らないグラウンドがあります。ハンマー投げサークルも、雨天でしたので、とても投げづらかった。サークルが滑る、滑らない場合があります。事前に競技場に行って周りの環境を見ること、また時間に

合わせて旗を見て風向きを探ることが重要です。経験を積んだ選手はそういうことをするのが当たり前ですが、そこがどうだったのか。地元のやり投げ選手が大記録を出しました。日本選手も、あちらの方から風が吹いているからあちらの方へ鋭角にやりを投げろ、とコーチも風を見ながら言っていました。コーチの役割も大切ですが、選手自身も競技当日だけでなく、同時刻に競技場に行って競技環境を見る。雨が降ったらどうなのかという対策も考える。これは経験の1つです。心の安定についても万が一失敗しても、フィールド競技は3回の試技がありますので、その中でコントロールできる「心の安定性」も重要です。それが記録や順位につながると今回のユニバを見て感じました。

おかげさまで、ほとんどがいい結果になりました。もう少しでトップ8、もう少しで決勝進出という選手もおりましたが、それは結果論です。その前に先ほど言ったコンディション等を考えていけば到達できるのではないかと考えています。

競技運営（サブトラック）について： 投てき練習場は離れていましたが、バス運行がありました。パスポートを所有しているとIDがなくても中に入れたというのはありがたかったです。日本で行われる大会ではどうなのだろうか。

投てき物について： やりの長さや重さは決まっていますが、硬さについては選手のタイプによって選ぶことができます。それ（主催者が準備するやり）が十分にそろっていたのか。台北の選手（優勝者）は日大のやりを使用していました。

選手選考の際、台北で開催されることから中国が参加しないだろうということ、英国は欧州選手権を重視していること、ドイツの動向はどうか。やりは世界選手権2位の選手（28歳）も出ていた。戦略・戦術も重要であるが、中国や英国の不参加が競技結果に大きく影響したと思う。

3. JOCとの派遣数に関する折衝

船原 今回、ロシアはドーピングの関わりから参加していなかった。前回大会ではロシアはメダル29個で最多でした。今回は大会の環境（参加国）が変わっている。よく見ると日本はメダルテーブルではトップだが、団体のハーフマラソンと競歩の3個を除くと4個になり、ポーランドの6個を下回る。メダル総数も13個になる。こういう現実もきちんと受け止めておかなければならない。

メダルが多かったということはJOCにアピールできるポイントであるので、それを主張すればよいと思う。派遣に関してはJOCとの兼ね合いもあると聞いているので、栗山さんからJOCの派遣についてお願いします。

栗山 JOCの派遣ということで、昨年12月に岸記念体育会館でJOCと出場枠数の折衝がありました。学連基幹役員、陸連1名、大西事務局長を含む5名で折衝に参りました。前回は選手総数が32名で非常に絞られた中での選手選考でした。他に出場させたい選手がいてもこの枠数のためにメダルの可能性が高い選手（種目）から選ぶしかなかった。そうすると可能性のある選手でもなかなか出場がかなわないということがありました。

今回は特に標準記録（配布資料の中ごろに過去4大会の参加標準記録一覧表が載っております）を見ますと、カザン2013から台北2017までほとんど変化がありません。一部の種目はむしろ下げて設定されました。今回は突破した選手が何人いるのかをまず挙げ、そのトータル人数から予選通過可能、決勝進出可能なところを順次挙げていったら、総数が40名を超える数になりました。

もう一つは日本陸連の女子の短距離強化を目玉にしよう。単独で世界陸上や五輪にはリレーで出ることがなかなかかなわない。そこでユニバならばなんとか出られるのではないかと。そこで今回の台北では女子のリレーをぜひ派遣してはどうかという意見が出ました。女子のリレー5名をプラスアルファで入れるとなると40名を超えます。しかし今までの選考会の流れを見ると女子選手で、参加標準記録を突破している単独種目の選手がいなかった。そういう状況の中でリレーに出せるのかという意見もありました。厳しい状況ではあったが、出場させなければ力を出せないであろう。一応経験させてその経験の中で彼女たちの実力を期待しようという意見があった。最終選考の会議では賛否両論でギリギリまで検討したが、最終的に女子のリレーを入れたという経緯がある。

最終的に41名の希望を出してJOCから38名が認められました。前回よりプラス6名の大幅な増枠でした。本音ではもう少し出場させたい個人種目がいくつかありましたが、これは次回に向けてわれわれが努力し、そして強化の中でこれは世界に向けて十分戦えるということを示していかないと、JOCもそう簡単には認めてくれません。ぜひ40名を超える人数を次回に確保できるように努

力していきたい。

4. ユニバ大会前のJISS集合

船原 JOCとの絡みでお話をさせていただきました。米田さんのところのメダルを取るということでは長距離が看板種目になる。至上命令ということで、JISSで集合したというお話がありました。過去にもありましたか。

米田 はい。何回かの経験を通してユニバ直前に一回集合して選手とスタッフの顔合せをしました。顔合わせによって意識を共有していくことの重要性を感じ（結果につながっていた）たので、最近の大会では事前に集まっています。

安井 短距離ではいつもやろうと言いながら、なかなかできなかった。今回はリレーのバトンを確実に押さえてということで事前にやった。これは非常にうまくいった。

森長 跳躍はなかった。短距離がやっているところに一緒に入れてもらうという形が多かった。今後はそういうことも考えていかなければいけないと思う。

岡田 投てきも強化委員長中心に事前にサポート体制も考えたミーティングを行った。

5. 競技場の事前情報（情報収集と受け渡し）

船原 森長さんから、競技場などの事前情報を、という話がありましたが、現実にはチームとは別に先乗りする人はいないですね。そのあたりの情報収集や受け渡しはどのようになっていますか。

森長 ユニバ大会で結果を出すのであれば、何らかの形で事前に調査をしてサブトラックの素材、メインとの違いを報告していただくとか、練習会場なども、選手やコーチが事前の練習や調整に安心して当たれる情報がほしい。

船原 過去の大会でコーチらが先に行って調査したケースはありますか。澤木先生？

澤木（副会長） 1980年代～1990年代のユニバ大会監督のとき、JOCの視察団として行った。陸上競技の監督としては行ってない。

船原 その時は陸上競技場のサーフェイスなどを調べたわけですね。

澤木 はい。

船原 あったわけですね。その辺りの情報の有無は大きいですね。特にフィールド競技、長距離もそうですね。

森長 跳躍は感覚が大事です。感覚が違えば助

走距離なども違ってくる。選手はサーフェイスによってピンの長さ、スパイクの硬さなども変えて準備する。そういうところにも効果がある。可能な限りわかればしっかりと準備して試合に臨めるので選手の安心につながり、結果にもつながる。事前情報は重要であると思う。

6. アベレージ/安定性（その2：掘り下げ）

船原 先ほどの「アベレージ」という用語についてももう少し掘り下げたい。平昌五輪（スピードスケート）の小平奈緒選手は「8割の力で勝てないと五輪で金は取れない」と言っていた。アベレージでも勝てるというのは相当な力がないといけないなと思いますが、アベレージについて、岡田さん、もう少しお話ししてくれませんか。

岡田 アベレージ、安定性について、どんな環境でも、というのはなかなか難しいが、どんな環境でも同じような試技が行えること。世界大会において自己新で勝つというのはあまり目にしていない。自己新を高く持って行きながら、8割程度、7割程度でも勝てるような実力が大事ではないか。

栗山 同じようなことになります。種目によって、当然、フィールド種目、短距離種目、中距離種目で違うと思いますが、アベレージは再現性にもつながる。動きの再現、いわゆる確実性のある動きがいつでも、かなりの高いレベルで表現できることが失敗を少なくすることにつながるのではないか。従って、大きな試合になるほどマイナス要素が多くなるが、それで自分を追い込むのではなく、マイナス要素をできるだけ少なくして失敗を少なくすることを目指すのが成功につながるキーポイントになるのではないか。

7. リレー種目と長距離が好成績の秘訣

船原 時間が残り少なくなりましたが、どうしても話していただきたいのはリレーについてです。男子は2大会連続金メダルでした。アメリカのアンカー（バレルの息子）の追い込みをかわしての金メダルでした。また女子も銅でした。秘訣は何だったのでしょうか。

1) リレー種目

安井 一言では言いにくいのですが、私のキーワードにした「実力発揮」というところで、担当の任務を全うするという事に集中しましょう、と言いました。4人いるので1人の力だけで成績が残せるわけではない。各人がそれぞれ責任を果

たすことが重要です。

男子の4×100mの予選ではウエルネス大の田中選手(100m)がバトンを渡してすぐに転倒しました。彼は国際大会が初出場でした。100mも舞い上がった状態で2次予選で敗退しました。リレーの予選も空回りしました。そこでメンバーを集めて、力をしっかり出せばトータルのタイムでいけば勝てるから、とにかくアンカーの山下君までに5m離そう。そうすると、バレルは9秒台(9秒93)。山下君は10秒台(10秒48)。どれだけ追いつかれるかというところかなり追い込まれるだろう。戦力分析をすると、3走までに目標5m離すと、山下は逃げられるぞ、と短距離コーチが綿密に計算し、選手にそういう話しをし、決勝に臨んだ。

女子は個人で4人とも決勝に残れない状況でした。リレーは最後の種目でした。それに向けてもう一度立て直すという意味で、ちょっと刺激の強い練習を入れました。日程をみて諸準備をコーチがつきっきりでやっていました。現場からすると絶対勝てるというよりも、「ひょっとしたらいいかもね」という雰囲気を作れると、案外成績は上がるものです。これはどの種目でもそうだと思う。変な過剰な期待感ではなく、もしかしたらいいかも知れないぞ、という期待感を持たせられたことが今回の結果につながったと思う。

2) 長距離種目

米田 好成績の要因として、長距離は、優遇されていて、一昨年からオランダのロードレースに派遣され(11月)、2年ごとに世界大学クロスカントリーがあり(4月)、海外遠征が学連の代表として2回組まれています。そういう遠征の経験者が少しずつ増えてきて、ユニバが初の海外という選手が少なくなってきました。そうすると現地(ユニバ大会)に入ってから余裕度が違います。またチームジャパンとしての意識がユニバに行く前から出来上がっています。ユニバで結果を出すためには、ユニバ大会前の遠征慣れが非常に大切であると思います。

船原 ありがとうございます。第2部につながる話をさせていただきました。時間になりましたので、一部はこれで切り上げます。第2部について申し上げます。さきほどの合宿での情報交換とか、いろいろの顔合わせがパフォーマンスにプラスに作用した、ということが今回のヒアリングを通じても感じられました。そのあたりをもう少し詳しくお話していただくことを第2部の骨格にします。それに加えて、会場の皆さんからこういうことも論議してほしいとか、こういうことはどうなのかという内容も加えて進めていきたい。よろしく願いいたします。では休憩に入ります。

Ⅲ. 第2部 ユニバーシアード競技大会ナポリ2019に向けた今後の課題

—今後の強化のために何をすべきか—

第2部は、「ユニバーシアード競技大会ナポリ2019に向けた今後の課題—今後の強化のために何をすべきか—」のテーマのもとに、第1部と同演者5名（栗山佳也氏、安井年文氏、米田勝朗氏、森長正樹氏、岡田雅次氏）が船原氏のコーディネートによってさまざまな意見を交わした（45分）。各演者はユニバ大会台北2017の「大会前・大会期間中・大会後」に関わる諸任務（仕事）の実際を述べながらテーマに示す今後の課題（容易な課題か、困難な課題か／または課題のヒントや示唆など／または今回の問題点など）も述べた。また会場との質疑応答もあった。その模様を一部要約して報告する。

1. ユニバ大会前の合宿とその意義・理由

船原 第1部でも何人かの方がおっしゃっていましたが、ユニバ大会の事前合宿や練習も含めた顔合わせが大会で良い結果をもたらしていたのではないかと。このことについてもう少し具体的にお話をいただきたい。

1) 中・長距離部

米田 私はユニバのスタッフとして何回か帯同させていただいております。一番肝心なのは「スタッフ間の意思疎通」であると思っております。今回のユニバ大会でも現地に入って、まずスタッフのミーティングができる場所を探し、確保しました。皆で一日の反省をしながら、また明日に向けてということ。普段は短距離、長距離の各ブロックに分かれていますが、こういう日本代表の遠征ではブロックに関係なくスタッフの方々が皆でいろいろな意見交換をして結果を残していくことが大事ななと思っております。一番気をつけなければいけないのは、各々の選手のパーソナルコーチとどういうふうに接していくか、これが重要であると思う。

今回もある大学の監督から「ちょっと無理だから代えてくれ！」と言われましたが、「それはできません」と突っぱねました。さらに「なんとか

してください」と言われましたが、お断りしました。結果的にその学生はメダルを取りました。自分の選手ではない選手にどのように接していくか、またパーソナルコーチと日頃からどう付き合っていくの。日頃からのコミュニケーションを大事にしていくことが重要であると思います。

2) 投てき部

船原 いまパーソナルコーチとの関係ができましたが、ナショナルコーチとして行くのですから、例えば、別の大学の選手でもはっきりいろいろなアドバイスをしてもよいと思いますが、岡田さん、具体的に何かありますか。

岡田 今回、選んでいただいた5名は3大学から出ています。日頃から仲良くしているコーチですので、コミュニケーションは問題がないです。日本はこうやって投げるという共通の技術とそのポイントについてはお互いに話せるようになってきたので、とても良いのではないかと。強化委員長も投てきなので皆で話して皆で応援したことが選手の実力発揮につながったと思います。

船原 技術的にヒントになっていることは何かありますか。

岡田 私もやり投です。風向きとか、槍の硬さなどについてはコーチ間で話している。日頃あれを使っているが、今日はちょっと違うのではないかと。横から見たらこうだけど、後ろから見たらこうだと試技の間にコーチ間でよく話しています。

船原 事前の打ち合わせでは栗山さんとの間でいい話があったそうですが、いかがですか。

岡田 日頃、私が見ている選手が栗山先生のアドバイスのおかげで、「ドカン」と結果が出ました。さすが栗山先生ですね。日頃は私が見ていますが、栗山先生にも客観的に見てもらっています。私と栗山先生とは話しているが、選手も一緒になって話すことはこれまではなかったです。

栗山 岡田先生が普段見ておられる選手も他大学の3選手もほとんどジュニア時代からお付き合いがあります。中学生、高校生の時から、この選手はこういう性格でこういう考え方をしている、

というのが事前にわかっている。そのような選手がある大学に進学し、チームで一緒になった時、こういう動きになっているけど僕はこうした方がいいと思うけれども、先生に一度相談してごらん、と言うことは日常的にやっている。岡田先生、やっていますね！

岡田 はい。

栗山 先ほど米田さんも言いましたがパーソナルコーチとの関係（情報交換）とか、今、こういうところで問題を抱えて苦しんでいるところも、わかりつつ試合を迎えていることがあります。それがいい結果につながるのではないかと思います。今回はユニバ大会台北直後にインカレも控えていて、持って行き方が難しかった。大学間の垣根を崩していけないと、インカレのポイントにしばられると全体の強化はどうしても頭打ちになるだろう。そのあたりを指導者が理解して国際的な選手にどう育てていくかを前向きに考えていけば、もっと伸ばせるところがあるのではないかと。

3) 跳躍部

船原 今のお話から、パーソナルコーチとは別の視点があると思いますが、技術的な種目でいうと森長さん、この選手はこうだとか。具体的なことはないですか。

森長 今回は特になかった。跳躍種目は他種目と比べると、各指導者の技術等がまちまちなので、現場では指示を出しにくい。先ほど長距離種目で話があったように、代表のスタッフとパーソナルコーチが事前にきちっと打ち合わせ（選手の癖なども含めて）をしてチームとしてしっかり指示を出していくことが重要であると思う。

4) 短距離・ハードル部

安井 ユニバ大会台北の時に短距離の選手とずいぶん話をしました。最初は人見知りをしているので話しにくいのですが、話し始めると非常にいい感覚を持っている選手が多数おりました。その辺のところは、先ほど米田先生がおっしゃっていたように、パーソナルコーチの方と代表役員（コーチ）とそこで情報交換があると比較的スムーズに国際試合でのパフォーマンスを引き出しやすいと思う。それがうまくいったのは、投てきも短距離も事前合宿をJ I S Sに泊まってミーティング（技術や他の内容）をしました。昔の言葉でいうと、「同じ釜の飯を食う」という部分が一度や二度あると問題が解決すると思います。

森長先生がおっしゃっていた技術のことをあま

り言いすぎると跳躍は非常に難しいです。短距離もパーソナルコーチと代表コーチが技術を突き詰めて話すとおそらく試合にならなくなります。そこで持っているものをいかに引き出すかというのがナショナルコーチの役割であると思います。そこに深く踏み込み過ぎると、試合の時には多分迷走してしまう。突き詰める技術として、リレーは。「背に腹は代えられない」ので、バトンパスを突き詰めます。アンダーハンドが良いのか、オーバーハンドが良いのか、それから走順のところは特性を見極めた配置をすることで順位が変わってきますので、そういうことは必要であると思います。

船原 米田さん、J I S Sでの合宿は何日間でしたか。

米田 一泊二日です。われわれ（コーチ）からユニバ大会に臨むにあたっての細かい注意事項、ドクターからドーピングに関する詳細事項、そして大会まで約1ヶ月ありますので、トレーナーから1ヶ月間のコンディショニング方法の話がありました。

2. 代表選手のアンケート（回収率、内容、今後の在り方）

船原 今のお話に関連します。さすがにインカレ前は難しいと思いますが、個人選手権の前後とか、休養を兼ねてとかの調整期間中に、選手やコーチと一緒に集まる機会がもっとあっても良いのではないかと。

それと、資料を通して感じたことがあります。今回、選手にアンケートを求めたが、回収率は50%でした。これは少し問題であると思う。帰りの飛行機の中で全員に書かせたらどうか。また内容的にも修学旅行の感想文みたいなものがある、大学生のレポートとしてはどうかという気もします。競技者の体調やテーマ、競技結果の分析や反省などを具体的に書かせる項目をフォーマット化し、さらにデータベース化して皆が検証できるようにするのはどうか。それを学連が用意してもいいのではないかと。安井さん、いかがですか。

安井 私は総務でしたので、回収できなかった私に責任があるのかなと思います。この場をお借りしてお詫び申し上げます。

実際に選手はその昔と比べて考える力がずいぶんなくなったとか、文字を書かなくなった等のごく一般的な風評があると思いますが。私が携わっていて感じたのは、今は情報が氾濫している中で

選手はそれなりに考えているということを確認しています。実際に表現の仕方をフォーマルな形で出すのが苦手なのか、逆にSNSという俗語を使ったような会話形式ではいろいろな話が出てきます。

(補足：代表選手のアンケートについては、2017年10月1日時点で19名の回答があった。その後、督促を行った結果、2018年3月9日時点では34名の回答があった。詳細については「資料6」をご参照願います)

3. 会場との質疑応答(その1)

1) 質問1 ユニバ大会とU18・U20・シニア大会の関係

船原 ここで会場からの質問に入ります。まず坂東孝訓さん(日本学連総務委員会委員、元日本学連幹事長)の質問です。ユニバ大会とU18・U20・シニア大会との関係についてです。ユニバ大会の位置づけは難しい面があると思いますが、これについては栗山さんから整理していただければと思います。

栗山 カテゴリーとしてU18、U20、シニア大会に分けられていますが、これはU18→U20→シニアとつながっていると考えないといけない。競技者が最終的にどこに最高の目標を置いているかが問題です。例えば、今20歳の選手がU20に目標(ポイント)を置いているのはあまりにも手前すぎます。ユニバ大会を考えますと、20歳を過ぎて21歳、22歳のあたりに最低限の目標を置かなければならないでしょう。その辺は将来に向けてユニバ大会がシニア大会へのステップアップの入口であり、そこをクリアして初めて世界選手権や五輪への扉が開かれるという位置づけでユニバ大会を考えてもらいたいです。

2) 質問2 海外遠征での安心材料

船原 山本雄太さん(東海学連)の質問です。

3月に台湾に行く予定です。海外遠征では選手のモチベーションをどう上げるか。また海外における選手の安心材料は何ですか。

岡田 私は学生の時に代表として一人で米国に行きました。今は大学が数種目を海外に行かせています。今年狙っている種目があり、昨日も中国に行かせました。さて何が安心かという、安心材料は食事です。現地の食物を食べないとユニバ大会等に対応できません。現地のをどうセレ

クトして自分に合うものを食べるか、またちゃんと寝られるかです。ユニバ大会やジュニア大会の宿泊や食事は恵まれていました。今回のユニバ大会は良すぎて良くないのか、もっと良くすればもっと良い結果になるのかわかりません。もし海外に皆で合宿に行く機会があれば、日本のいい所を知った上で海外の良い所を知ってほしいと思います。

安井 岡田さんと関連しています。海外での生活ではまず食事と安全です。安全は全てにおいて選手がここに行けば何かできるとか、ここにいれば大丈夫といった安心という部分が担保されればおそらく選手は非常に落ち着いて競技に臨めるでしょう。選手村でも食事は平等に出ておりますが、最初は慣れるまで時間がかかります。われわれでもそう感じますので、食事を中心とした生活基盤とは安心を担保してあげることに尽きると思う。

3) 質問3 ユニバ大会の競技運営

船原 川崎和葉里さん(関東学連)の質問です。ユニバ大会台北の競技運営で日本に参考になることがありましたら教えてください。

米田 今回のユニバ大会の運営については日本との違いをあまり感じなかったです。

船原 では、ヨーロッパのロードレースはどうですか。

米田 盛り上がり方が全然違います。選手が気持ちよく走れるような雰囲気づくりにすごく気を使っていると感じます。

船原 栗山さん、いかがですか。

栗山 台湾は大きな国際大会の開催が初めてであったと聞きました。いろいろところで大会運営の不慣れさがわれわれにも影響があったと思います。例えば、直前の変更。バス連絡(渋滞があると約30~40分の遅延)。街の中心にあるサブトラックは手狭で窮屈な感じ。しかしセキュリティは通常の国際大会と同様でした。

4) 質問4 九州学連の長距離強化のヒント

船原 吉田裕彦さん(九州学連)の質問です。九州学連の長距離強化のヒントをという質問です。何か秘訣があれば。

米田 九州学連というよりも、男子に関しては関東に選手が集まっているので、関東学連以外の各地区学連は大変だと思う。一方、女子に関しては男子ほど関東に選手が全て集まっていない。長距離指導者が伊東先生を中心に考えているのは、強化合宿は自分たちの大学だけでできるので、合

同合宿などをおこなって互いに刺激し合って皆で競技力を高めていこうというのもあって良い。先日も合同合宿をしました。これは長距離に限らず、先ほど司会者から話がありましたが、実業団は実業団連合の合宿があります。高体連も合宿をしています。しかし、今、日本学連の強化合宿は組まれていませんので、今後、強化合宿を考えていくことが必要であると思います。

5) 質問5 地区学連の海外遠征

船原 西村浩登さん(中国四国学連)の質問です。地区学連は予算の関係から海外遠征は難しいと思う。日本学連は海外派遣の予算措置があるのでしょうか。

永井(専務理事) あります。「計画」してくれないと困ります。強化委員会が計画してください。ただし、湯水のようにあるわけではないので、ある一定の選手に絞ればできると思います。まだ黒字の団体ですので、何とか絞り出せると思います。その一環として、強化合宿ではないですが、現在もオランダに長距離の派遣をしておりますので、何とかなると思います。

4. コーチからみた選手の評価(想定と実際)

船原 心強いお言葉をありがとうございます。競技委員会はどんどん申し出てくださいますということですね。先ほど途中で終わってしまいましたが、選手へのアンケートについては、回収率の問題や中味(内容)の問題だけでなく、コーチももっと踏み込んだ評価をしてもいいのではないかと。例えば、現地に入った時の体調やエントリーメンバーなどからこのくらいはいつでもいいなという見立てをする。試合前に諸情報を集めて予想される成績をイメージする。そして想定と実際の結果がどうだったかを分析することによって、その後の大会に経験値として生かせるのではないかと。コーチのレポートも詳細にできないか。専門家の目として個々の選手の分析と評価をしてもよいのではないかと。思います。

安井 私に宿題をいただいたような気もするが、実際に各コーチの先生からレポートを書いていたいております。ただ、フィードバックやフィードフォワード、先に進めるということになるとフォーマットとしてしっかり項目づくりが必要であると思います。一つ言えることは、今回のユニバでいうと、スタッフとして初めて来たのは1人でした。経験値の部分で解決していることが非常に

多くありました。それが今回の結果に反映されていると感じております。今回大会の立地が良くなかったのも、どういう形でウォーミングアップ会場に連れていくとか、事前調整をどのようにするのかについては毎晩ミーティングを全員集まって行いました。長距離さん、明日は何時に出発してどこに行って帰ってというやりくりを夜遅くまで調整しました。真夜中の1時、2時はざらにありました。そういうことをいわずにできる方ではないといけないと思います。一つに体力が必要です。そういう部分をどんどん一般化すればいいかどうか分かりませんが、コーチの力は単純に試合に行って「足が上がっている/下がっている」というコーチングだけではなく、「全員が全体の流れを見られる人」が共通項であると思います。

今大会はスタッフの任務遂行が良かったので、たまたま結果も良かったと思う。実は前回も前々回もほぼ同じスタッフで、あまり代わり映えしない面もありますが、その経験値が今回生きてきたと思う。不測の事態があればあるほど経験値が生きて感じました。それを同じ人でやればいいのかというのではなくて、そういうものを引き継いでいければいいのではないかと。

5. コーチ情報の伝達(内容と方法)

船原 今回は熟練したコーチ集団であったので、逆に言えば新しい人への引き継ぎがより重要になるわけですね。私が心配するのは、各コーチの情報がどうやってきちんと伝達されるかです。データ化された情報があるかです。米田さん、その辺りについてどうでしょうか。

米田 ユニバに関しては行ってみたいという環境かがわからない。前回がこうだったから今回もこう、というのは難しい。それを引き継ぐには、新しい人も入れながら経験を引き継いでいくしかない。一番大事なのは経験してもらうことではないか。今回の長距離は新しく東洋の酒井さんに入ってもらいました。少しずつ入れ替えをすることを専務理事も考えておられると思いますが、そういう形で引き継いでいかなければならない。いつまでも同じ人がやることは難しい。強化委員長や専務理事が考えていかれることと思う。

森長 確かに毎回同じような状況ではないと思う。その都度対応できるようなデータは必要と思う。レポートの回収率が低かったというが、その中には経験が非常にある選手もいれば、初めて経

験した選手もいると思う。彼らを感じたことがいろいろあると思う。そういうことをフィードバックで、どういう状況でどう対応して結果としてどうだったのかについて、事前の合宿やミーティングも大事だが、逆に大会終了後、帰国してからも一度集まって選手プラス支援コーチも含めて話し合いの場を持てれば、次回に向けて反省などいいものも出せるのではないか。

船原 大会後もという話がでましたが、それも含めて。岡田さんいかがですか。

岡田 投てきについては、技術の話をするのが種目の特性上多いと感じています。プライベートで食事に行ったときも、技術に関して「ああだ、こうだ」という話が多いです。現在、大学に勤務していますので、インカレなどの件でいろいろの方と話をする機会が多くあります。そういう中から代表コーチを選んでいただいていると感じている。

船原 今、森長さんから帰国後の総括が必要ではないかという話がありました。帰国後の引継ぎも含めて、全体的な引継ぎは具体的にどのように行われてきたのでしょうか。

6. スタッフの引継ぎ（全体の責任者、スタッフ、JOC派遣者）

栗山 スタッフの引き継ぎは強化委員会の前任者から私が引き継いだ時点で、次回ユニバの責任者としてチームをコントロールする立場になります。スタッフは任期が何年間もあり、その中で動くこととなります。しかしそれにしぼられずに、その状況でその分野に詳しい人とか、あるいは専門的な人を入れられればいいと思います。JOC派遣の場合は、スタッフの人数も限られています。選手の人数配分に応じてその種目のコーチ数も割り当てられています。例えば、その種目の選手がいない種目は担当コーチもゼロになる。各種目のコーチが平等に海外の試合に向けて経験値を積むことが難しい面もある。日本陸連がU23などの強化プログラムを組んでいるので、そういう予算も活用させてもらって少しでも機会を使って外に出ていく。アジア地区であってもどんどん出ていく。そのような小規模の遠征を数多く積み上げ、そして選手もコーチも経験値を上げる、というのが差し当たりできることではないか。連合でも、先ほどの話で遠征や事前合宿などの予算の話題が出ておりましたが、積極的にそういう機会を設けて、

海外の言葉の問題、食事の問題、気候の問題などの全ての経験を積むことからスタートすべきでは、と思う。

7. パーソナルコーチとの連携

船原 関東学連からは公式ではないが、サポートでコーチの方がユニバに行ったと聞いています。そういう人たちともっと有機的なつながり（連携）をし、サポートしてもらうことはできないですか。非公式にでも何か頼めることがあるのではないか。

安井 ここに永井立子さんがいらっしゃいますので、直接お話をうかがった方がよろしいかと思えます。関東学連は、選手が選ばれたらパーソナルの指導者を視察の名目で選んで優先的に派遣しています。競技場には入れませんが、そこで一応コーチングという形がとられているようです。詳しくは永井立子さんからお願いします。

永井（立子） 関東学連では選手が選出されたとき、その選手の大学コーチがユニバのスタッフに選ばれていなければ、選手のために現場に行きコーチとして勉強してきてほしいという考えがあります。また選手がいればコーチ何名という制限は設けていない。ただ使節団という形ですので、IDカードは発行できません。もしIDカードが発行されれば近くで選手と接触することが可能かもしれません。代表チームのスタッフとの関係もあるので、観客席から見るとか、メールで連絡するなどして連絡しているようです。

船原 関東学連は強力な支援をされているようですので、関東学連のコーチと公式派遣のコーチが一緒になってチームジャパンとしてもっと活用できるように考えたらいいのではないかと思います。

8. 次回ナポリ大会2019の選考日程

船原 時間が押し迫ってきましたが、最後に今回のナポリ大会は7月開催です。早期開催になりますので、選考日程なども変わってくる。このあたりの状況について、まだ決まっていないこともあると思いますが、栗山委員長から一言お願いします。

栗山 台北2017は通常より開催時期が遅すぎたと思う。通常のユニバ大会は7月中旬から下旬です。台北2017の場合は長距離、競歩以外は6月の個人選手権を最終選考競技会と位置づけて最終決

定しました。長距離種目と競歩種目は3月と4月の日本陸連の大会で内定しました。

従来の時期（7月）にユニバが行われる場合は個人選手権（6月）で最終決断しては間に合わない、前年の日本インカレを参考にし、年が明けて春の4月の日本陸連のグランプリ大会が有力な選考対象の大会になる。そこでほぼ決定を見て、地区インカレですばらしい結果を収めた選手が出たら、追加材料として評価していく。ナポリ大会2019の場合も5月上旬あたりにはほぼ決定する運びになるのではないかと思います。

9. 会場との質疑応答（その2）

船原 時間になってきましたが、会場から質問はいかがでしょうか。

1) 質問6 跳躍と投てき（1～3ラウンドと4～6ラウンド）の戦い方と指導方法

澤木（副会長） 跳躍、投てきに1つ。日本の選手は5、6回目に極めて弱い感じがするが、岡田さんの大学の女子は強かった。何か特別なことをコーチされていますか。男子のやり投げを見ると最後の5、6投目はすごかったが、日本の男子選手はできなかった。女子はできた。日本の跳躍（三段跳）を見ていると、5、6跳目はドンと落ちた。その辺のところについてアドバイスをいただければ。

森長 <跳躍> まず日本選手が海外試合の5、6跳目であまり記録が出ない一つの要因は、前半の3跳目に力を使い果たしています。レベルが少しずつ上がっていますが、世界で戦えるというよりもトップ8に何とか残るとというのがまだ目標です。ウォーミングアップから普段以上に力を使い、最初の1跳目、最後の3跳目でベストを出すことが多いので、トップ8に残ってももう力が残っていないのが現状です。先ほどアベレージの話も出ました。もっと全体的に基礎体力や自己記録等を上げて、余力を持って4跳目以降に臨める状況を作ることが一つの対策ではないかと思います。

岡田 <投てき> 戦略は参加選手の記録を見て考えます。この読みを間違えるととんでもないことになります。さかのぼって世界陸上で男女のやり投げは決勝に残ったが、トップ8に残らなかった。決勝は12人です。上位（4名）、中位（4名）、下位（4名）に分けた時、下の4人にならなければトップ8に残れます。

今回は上位グループの4位を狙って投げる。女

子は天候のこともあり、58m～59mで確実に残れると考え、最初にそれが投げられた（2投目：61m）。さらに先に行くか、ということでもっと上の記録を狙い、失敗が続いたが先を見た上での失敗。最後に「やり」も変え、「投げ方」も変えて結果オーライになった（補足：斎藤真理菜：2位：6投目：62m37、PB）。

（参考までに：過去の世界選手権等では最初から力んでしまって失敗し、上位4位に入らなかったことがあった。戦略としてうまくいかなかった）

2) 質問7 実力近くの挑戦に伴う緊張のほぐし方と指導方法

松本（会長） 羽生さん（将棋）の話では、緊張する場面は自分の実力に近いところに挑戦する時。ものすごく高すぎる時や低すぎる時は緊張しない。という。緊張した時にどのように自分を良い緊張に変えるかが乗り越える術だと話していた。陸上もそうなんだと思ったが、そういう時はどのように緊張を解くのか。もう一つ羽生さんが、私はいかにこの局面を楽しむか、楽しい方向に変えていくと言っていたが、どのようなことを指導されているのでしょうか。

栗山 <投てき> 私の場合は現場の指導で用いる指導として、安井先生もパーセンテージの話をしていましたが、自己ベストを出そうとか、目一杯出そうとすると違う方向に力が入ったり過緊張になったりする。全力でなく95%くらいでいいぞ、という無駄な力が入らなくてベストが出たりする。直前に「おまえは行けるよ」と選手に安心感を与えたり、「周りもおまえと同じくらいの力なんだ」と言って安心材料を与えてあげたりするのが大事であると思う。

森長 <跳躍> 跳躍選手は緊張する場面が多いが、緊張するのは特別なことをしようとした時に出るもの。今までしたことがない跳躍をしようとした時とか。できるだけ普段通りにさせることが大事です。緊張した場面では普段通りの動作をすることが難しいので、繰り返しその動作をやらせて自信を持たせることが大事です。タブレットなどもあり、今はいろいろなことを知ることができるが、そこに行く前にもっと基礎的なことをきちんとやれば本番でもできるということを教えることが大事です。試合は試技の本数が決まっているので、練習でも決まった本数（例えば、3本+3本）の中でやることを意識させるようにしています。

米田 <中・長距離> ユニバ大会においてハーフマラソンは今まで走ったことがないところでレースをするので準備が大事です。事前に選手を集めて、コースの把握、ライバル選手の情報提供、緊張を解くためのシミュレーションなどをします。スタートまでにいかにいいイメージを持つかという準備。われわれが持っている情報をいかにしっかり選手に伝えてあげるかが大事です。

船原 これで終わります。ありがとうございました。

司会 打ち合わせ（2017年12月）では、日本選手は競技だけやって帰ってくるようなところも課題の一つ、という話も出た。また今後の課題の一つとしては平昌五輪の小平奈緒選手と李相花選手の関係のようなどころもあげられると思います。それでは本日の研究会のまとめを阿保委員長にお願いいたします。

IV. まとめにかえて、閉会挨拶

<まとめにかえて>

阿保 本研究会の内容は私のメモでも10枚以上になりましたので、今後の予定について簡単に申し上げます。（1）本研究会の内容は音声データ（録音）から文字データ（文章）に変換します。（2）「平成29年度ユニバーシアード強化研究会報告書」を作成します。ポイントは東京五輪（2020）も視野にいれたユニバ大会ナポリ（2019）に向けた今後の諸課題をできるだけ明らかにしたいと思っています。

次年度は、上記報告書で明らかになった今後の課題から具体的な施策案（強化事業内容）を考えます。この案は次回ユニバ強化研究会の資料にもなります。そして施策案が執行部等で審議、採択されることを願っています。本日の研究会では強化合宿や海外派遣などが施策案の一例として挙げられます。

司会 最後に閉会の挨拶を永井専務理事にお願

いいたします。

<閉会挨拶>

永井 ユニバ大会の報告会は毎回ありますが、こうやって検証することはなかった。今日は非常によかったです。

先ほど話題になったことに補足をします。最近の4大会の選手数は「32名-32名-32名-38名」でした。前回のユニバ大会光州2015では、日本はロシアに次いでメダル数が2番でした。台北2017の6名増加はJOCからのご褒美だと思います。前回より6人増加した分はどうするかについて検討しました。まず女子のリレーか。でも4人しか認められないので安井さんにはケガをさせずに走らせてとお願いしました。リレーは予選から学生新で走ってくれました。もう一名は競歩競技です。団体の金を取りたくて、これも予想通りでした。選考会では投てきが頑張っていたので投てきに1名です。

次回大会も個別折衝がありますが、前のユニバ大会で頑張ればJOCも多分応じてくれます。そうすれば今まで派遣できなかった種目でも派遣できるようになります。その時その時のユニバ大会で頑張ってくれば、派遣人数は増えていきます。スタッフはアディショナルを入れて14人くらい派遣しています。今回はできるだけ変えないという私の方針もありましたが、次回は3分の1くらい変えようかなと思っています。そうは言うものの、私は沢木先生、沢村先生と一緒に毎回行きました。

数日後のユニバ委員会でナポリの会期が出てくるはずです。はっきりしてくればホームページにも載せたいです。そのときはご協力をよろしくお願いします。今日は興味ある話でよかったです。ありがとうございました。

司会 皆様、演者の方々にもう一度、盛大な拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

以上

資料1 しおり (テーマ・趣旨・プログラム・演者ら)

平成29年度ユニバーシアード強化研究会 (第63回指導者会議)

ユニバーシアード競技大会台北2017の検証と今後の課題 —次回ユニバーシアード競技大会2019に向けて—

日本学生陸上競技連合では、日本陸上競技界の発展のため、毎年「指導者会議」の名の下、シンポジウムや講演等を通じて競技者強化や指導者育成に関するさまざまな課題について考えてきました。

過去3年は「日本学生陸上フォーラム」の名称で討論が行われ、多くの成果を得ることができました。

平成29年度ユニバーシアード強化研究会は、「第63回指導者会議」の別称であり、日本学連の独自性の1つであるユニバーシアード競技大会で学生アスリートが数多くのメダルを獲得するための研究組織です。本年度の研究目的は、中長期的な視点に立ったユニバーシアード競技大会に関する基本構想案(注:次世代の指導者育成等も含むビジョン/仕組み)の策定も視野に入れながら、ユニバーシアード競技大会台北2017の検証を行って、今後の課題を明らかにすることにあります。研究の基本的枠組みはスポーツ経営学的方法を参考にしました。各演者には検証の視点(注1)と資料(注2)等を基にして検証と今後の課題について発言してもらいます。また進行はフロアの人も含めて活発な意見交換の場になるように努めます。

注1) 検証の視点: 選手選考、成績、条件

注2) 資料: 選手選考、JOC報告書(日本学連会報)、競技成績、代表役員アンケート等

- 主 催 公益社団法人日本学生陸上競技連合
- 日 時 2018年(平成30年)3月3日(土) 15:30~17:20
- 会 場 中央学駿河台記念館 670号
- 対 象 日本学生陸上競技連合関係者(地区学連、加盟校等)

プログラム

15:15~15:30 受付

15:30 開会挨拶 松本正之氏(会長)

提案趣旨 阿保雅行氏(指導者会議運営委員長)

15:40~16:25(45分) 1部 「検証:競技成績とその周辺(コーチら)など」

16:25 休憩(5分)・・・休憩とフロアからの質問受付

16:30~17:15(45分) 2部 「今後の課題:今後の強化のために何をすべきか」

17:15 まとめ 阿保雅行氏(同上)

閉会挨拶 永井純氏(専務理事)

演 者 (順不同)

(総轄) 栗山佳也氏(大阪体育大学、学生連合:常任理事・強化委員長)

安井年文氏(青山学院大学、学生連合:強化委員会、短距離・ハードル部)

米田勝朗氏(名城大学、学生連合:強化委員会委員、中・長距離部)

森長正樹氏(日本大学、学生連合:強化委員会委員、跳躍部)

岡田雅次氏(国士舘大学、学生連合:強化委員会部長、投てき部)

コーディネーター 船原勝英氏(共同通信社、学生連合:指導者会議運営委員)

司 会 障子恵氏(跡見学園女子大学、学生連合:総務委員長・指導者会議運営委員)

資料2 研究枠組(イメージ図)

(2018-1-17 時点)

ユニバーシアード競技大会台北2017の検証と今後の課題
 ー次回ユニバーシアード競技大会2019に向けてー
 平成29年度ユニバーシアード強化研究会

展望と課題(中長期) ⇨ (今後の検討!) ⇨

派遣人数(JOC) JOC報告書		資料3				資料無(今後)	
ユニバーシアード競技大会(開催都市名・西暦)		深セン 2011	カザン 2013	光州 2015	台北 2017	2018	ナポリ 2019
計画・実施・評価		-	-	-	計画・実施・評価 (出来る範囲で)	計画・実施・評価	(参考) 東京五輪 2020
検証の視点						今後の課題とは何か 大会2019に向かっの 目標? 課題? 強化策など?	
I 選手選考 (4大会の共通性/独自性)	カテゴリ (例) 0 選考基本方針 1. 選考競技会 2. 選考条件 3. 標準記録 4. 選考基準 5. その他 6. ユニバーシアード標準記録	資料4					
II 成績	(例) 1. 競技結果(数値レベル) 上位入賞(メダル) 下位入賞 PB(自己新) SB(シーズンベスト) 2. 経験(意識レベル): アンケ	資料5		資料6			
III 条件	(例) 1. 代表団役員 リーダー・監督・総務 コーチ 医師 トレーナー 2. 大会開催地の諸環境 (例) 選手村(宿舎) 部屋(部屋割) ミーティングルーム 食事: 内容・時間 洗濯 練習場 トレーナー 移動(バス等) 競技場(メイン、サブ) 競技日程 アシスタントスタッフ その他 3. 強化策(大会前) (例) 日本学連(海外: 大会等) 日本学連(国内: 大会等) 参考) 地区学連(海外: 大会等) 参考) 日本陸連(海外: 大会等) 4. 情報(提供、報告等) 上記 I、II、III、の関係 5. 諸経費(会計) ユニバー大会の諸経費 6. 時間 上記 I、II、III、の関係 (いつ: タイミング、回数)	資料7		今回検討せず			
		有(一部)		有(一部)			
		今回検討せず		今回検討せず			
		有(一部)		有(一部)			
		有(一部)		有(一部)			
		有(一部)		有(一部)			
		有(一部)		有(一部)			

注1) 資料1 ユニバーシアード競技大会に関するJOC報告書(2011、2013、2015、2017)
 注2) 資料2 ユニバーシアード競技大会日本代表選手に関する選考基本方針等の推移(2011、2013、2015、2017)
 注3) 資料3 日本代表役員のアンケート回答(まとめ)
 注4) 資料4 代表選手のアンケート回答(一部)
 注5) 本連合の会報やHP等に掲載されている関係資料は、紙面の都合上、割愛する。
 注6) フォーラム2017(2017-3-4)で提案された今後の課題(伊東浩司氏):
 ① 情報の共有化、② 選手の共同育成、③ 選手への情報提供、④ 海外大会への出場

資料3 JOC報告書(2011、2013、2015、2017)(要旨)

<はじめに> 4大会の推移(比較)が見やすいようJOC報告書の一部割愛や移動等を行った。

都市・開催年 競技期間	第26回・深セン(2011) 8月16日～21日	第27回・カザン(2013) 7月7日～12日	第28回・光州(2015) 7月8日～12日	第29回・台北(2017) 8月23日～28日
日本選手団 (選手、役員)	選手：男子21名、女子11名 役員：10名 + 3名 (アデショナルオフィシャル)	選手：男子23名、女子9名 役員：15名	選手：男子23名、女子9名 役員：14名	選手：男子24名、女子14名 役員：14名
1. 前回大会 後の重点強 化策	過去の大会実績から短距離(含リレー)、400mH、男女長距離及びハーフマラソンでのメダル獲得に重点に置いた強化策を実施した。 具体的には、日本陸連と日本学連で進めるU23の強化方針に沿って、ヨーロッパ遠征や合宿を実施した。特にヨーロッパ遠征は地区学連、実業団連合、日本陸連と連携して選手派遣を行い、海外での競技会において実戦的な経験を積むとともに互いに切磋琢磨する機会を設けてきた。また、長距離・ハーフマラソンは、世界学生クロスカントリー選手権大会(個人優勝、団体優勝)、8月の暑い時期に開催されるニューカレドニア・マラソン(ハーフ、女子が1～5位独占)、国内では千葉国際クロスカントリー、福岡国際クロスカントリー、国際千葉駅伝へと派遣を行い、実績を積み重ねてきた。さらに、次代を狙う世代の強化を図るため、ユース、ジュニア、U21、U23からシニア(チームジャパン)へと続く中長期の強化計画も各団体での支援を中心に実施してきた。今大会のトラック、フィールド種目の代表選手が世界ジュニア選手権大会経験者	過去の大会で入賞実績のある種目を中心として、ジュニア時代からの一貫性のある強化を実現するために、日本学連強化委員会、日本陸連の強化策との連携をとり、国際競技会での経験を通して次世代を担う競技者の育成を図ってきた。 本大会でのメダル獲得を目標にヨーロッパ転戦、夏場のハーフマラソンであるニューカレドニア遠征、世界大学クロスカントリー参加、アジアの競技会派遣などの競技会参加の機会を設け、個々の記録更新や好成績の実績をあげながら海外での経験値を高めてきた。 また、トップレベルの強化に加えて、全国の各地区学連でのコーチングクリニック、指導者会議などの事業も実施し、選手強化および指導者育成につながる環境整備にも務めてきた。	前回のカザンでは、史上最多タイのメダル数、入賞最多成績であった。この結果を上回る成果を出すために選手選考委員会が昨年度に立ち上げられて選考基準や代表候補選手リストの作成に取りかかった。 メダル及び入賞が見込まれる選考のために明確化された基準作りが行われた。過去3大会の決勝進出8位記録の平均値を算出し、種目の特性や開催地、開催国の状況等を勘案し、日本独自の参加標準記録(ユニバーシアード競技大会での公式の標準記録はあるものの日本のレベルはそれを遥かに凌駕している)を作成した。 陸上競技は種目が多数存在し、其々の種目特性を有すること、さらにハーフマラソン、競歩については得意とするリレー種目の特性も考慮するという事も確認された。 各大会の結果から分かるように、メダル獲得に絞った選考基準で考えると、男女のハーフマラソン中心とした長距離種目、男子の短距離種目およびリレー種目といったところは重点的に選考していく必要があると考えられた。そのため男女のハーフマラソンは5人エントリーできるため、規定最大の5人をそれぞれ選出すること、男子のリレーに関しては一般種目のエントリーは最大2名であるため、4×100mR、4×400mRのそれぞれの種目にリレー要員としては規定では2名までエントリーできるが各1名のリレーメンバーを選考し各リレー5人ずつのチーム	前回、前々回大会での優秀な成績を残した種目やブロックで、継続して優秀な成績が見込まれる種目を取り上げていくことを第一階とした。 前回の光州での結果は男女あわせて金4、銀3、銅5、メダル総計12、入賞数は13種目であった。史上最高数であった前々回に比べてメダル数は減ったものの、金メダル数は増えた。前回・前々回とほぼ横ばい結果であったといえる。短距離、長距離、跳躍、投擲といったそれぞれのブロックでメダル・入賞へ最も近いとされる選手に重点的にフォーカスを当てる事が確認された。 さらに前回大会以降、大きく力をつけた選手や大学に入学してきた有力選手を自己記録と鑑みながら日本学生陸上競技連合(以降、連合)における独自の大枠のリストを作成した。 さらに過去3大会の競技成績から割り出した連合独自のメダル獲得、入賞記録、およびラウンド制の場合は決勝進出記録を作成した。これらの記録の中で大きく重用したものは入賞記録である。以上の記録から独自の派遣参加標準記録を検討した。以下のものが選考基本方針である。 注) 選考基本方針：別紙参照 これらの作業にリンクさせながら、JOC派遣事業であるユニバーシアード大会は陸上競技の選手枠として派遣人数の増加を2016年の冬に行われたJOCと各競技団体との個別折衝を通

	<p>(優勝・入賞者8名)を中心としたチーム編成となったことはその成果ともいえる。その他、ユニバーシアード対象者には選手選考の際に重要となる試合を指定し、日本学連が設定した標準記録を複数突破することを義務付け、各大学、所属チームごとにおいて強化策を推進してきた。</p>		<p>編成にするという形となった。しかし、上記の構成で陸上競技全体を構成してしまうと他種目での選手を選考することができなくなる。そこでハーフマラソンは「5人の内、単独の長距離種目と兼ねることができる選手を優先していく」こと、リレー種目においては「4 x 100mR、4 x 400mRの両リレーを走ることができる選手を優先する」ことが確認された。これらの方針に基づき、前回大会での過去最高の成績を超えることを目標とし、特にメダル獲得数を増やしていく策を取るべく、さらに柔軟に対応していくこととなった。</p>	<p>じて進めていった。前回、前々回での選手数は男子23名、女子9名の計32名であったが先述の派遣参加標準記録では多くの選手が突破してくるものと予想されたため約10名の増加を申請した。最終的には6名の増加を認められた。したがって選手38名、役員(監督、コーチ、トレーナー、ドクター)15名の総計53名が承認された。そして派遣標準記録として設定したものが以下の通りである。 注) 派遣標準記録(台北/2017)：別紙参照</p>
--	---	--	--	---

<p>2. 選手選考の経過と本大会への強化策</p>	<p>深セン(2011) ＜選考経過＞ 日本学連独自の標準記録を突破した者の中から選考するという基本方針に基づいて選考競技会を指定して選考を行った。しかし、未曾有の東日本大震災で男女ハーフマラソンでは選考競技会が中止となったため、代替え10000mを指定して男女代表の選考を行うこととなった。また、競歩においても同様の理由で代表選考競技会の結果を基に出場した者の中から本大会で活躍できる者を代表とした。さらに、本大会前後に開催されるアジア陸上競技選手権大会、世界選手権代表と重複する選手については、日本陸連強化委員会と調整を行った。</p> <p>＜本大会への強化策＞</p>	<p>カザン(2013) ＜選考経過＞ 日本オリンピック委員会の定める日本代表選手団編成方針に基づき、日本学連としての選手選考規定を設け、選考委員会が選考にあたった。特に今回からは出場時に現役大学生であることを条件とし、これまでロード競技で選出していた社会人を対象外とした。選考必要条件とした標準記録は、今回も見直し作業を行い、入賞ラインの現状に対応できるものとした。指定選考競技会での成績および本年度陸上候補の特例も考慮し、メダル獲得、上位入賞が期待できる種目を中心にして選考を進めた。</p> <p>＜本大会への強化策＞</p>	<p>光州(2015) ＜選考経過＞ 選手選考に関しては選考競技会を指定しその試合での成績を重点的に考慮していく形をとった。 注) 選考競技会：割愛 尚、短距離種目で選抜された男子選手がその後、怪我で6月初旬に辞退したために、JOCへの選手変更を申し入れた承された。短距離種目は競技特性の上からも避けられない事態であり、JOCの理解の深さにより、代替え選手のスムーズな選考をすることができた。</p> <p>＜本大会への強化策＞</p>	<p>台北(2017) ＜選考経過＞ 重点強化策で浮き彫りにされた選考基本方針をもとに作成された派遣標準記録をどの競技会に適用していくかを以下のように決定し、選考の手順を整理した。 選考競技会及び選考条件について 注) I. 選考競技会：割愛 注) II. 選考条件：別紙参照 注) III. 標準記録有効期限：別紙参照 注) IV. 選考基準：別紙参照</p> <p>＜本大会への強化策＞ 注) 下記文章(出国前の事前合宿等)をここに移動した。 事前合宿として7月15(土)、16日(日)にナショナルトレーニングセンター(以下、味の素 NTC)で長距離種目の男子選手6名、女子6名、役員2名で戦術の確認、個々の調整練習の確認などを行った。特に個人の種目だけでなく団体種目としての戦略なども入念に確認された。 8月18日(金)、19日(土)には短距離種目、投擲種目の事前合宿を行った。陸上競技はそれぞれの特性が大きく相違するため走、跳、投といった種目群での合宿などがよく行われる。ここでは短距離の8名(男子4名、女子4名)の選手、コーチ3名でバトン練習を含めたチームビルディングを行った。8月18日11:00に集合し男女で分かれて練習を行い、リレー走順などの確認および実際のバトンパス疾走を行った。投擲は5名(男子3名、女子2名)の選手、コーチ1名で16:00に集合しミーティングを行い、現在の状態の確認および本大</p>
----------------------------	--	--	--	---

	<p>大会へ向けての強化策は、アジア陸上競技選手権大会、ヨーロッパ転戦を経験させながら、それぞれ所属チームでの強化活動を中心に進めた。また大会直前に長距離・マラソン、短距離・リレーチームは技術練習、コンディション確認などを目的とした短期合宿を実施しチーム力を高めた。</p>	<p>強化策としては大会前が大学授業期間内であったため、選手の日程を合わせることが難しかったが、一部の種目では、約1ヶ月前に体調確認と現地での情報共有を目的に短期合宿を行った。また、個人においては直前にヨーロッパ転戦での調整を行った。</p>		<p>会での小さな目標設定等を行った。 翌8月19日(土)は午前から女子短距離はバトン練習を中心に調整を行い、男子短距離は個人メニューに基づいた個人練習、投擲は各自の調整メニューに基づくやりの投擲練習を行った。各自練習後昼食をとった後、日本選手団の集合場所(品川グランドプリンスホテル新高輪)に向けて移動した。 8月19日(土) 16:00に第一陣(選手37名、役員12名)はグランドプリンスホテル新高輪に集合し、所定の手続きを終え、各自の体調、怪我の有無等を確認した。数日前の怪我の影響により、コンディション不調だった男子走幅跳にエントリーの橋岡優輝選手(日本大学)の大会出場を取りやめる判断をした。</p>
--	--	---	--	---

<p>3. 現地でのコンディションング</p>	<p>深セン(2011) 日本からの時差が1時間しかない中華人民共和国(以下、中国)への移動であったため、移動によるストレスも少なく、現地入りしてから良好なコンディションを維持できていた。シャトルバスによるスムーズに移動できた練習会場、選手村内のトレーニング施設などを利用しながら個々の調整は順調に行えた。また、チーム役員として帯同したドクターと3名のトレーナーによる万全のサポート体制をとりコンディションングの支援を行った。選手村とサブトラ</p>	<p>カザン(2013) 今回は、移動前後のコンディションの管理が大きな課題となった。到着まで長時間の移動と現地入りが深夜(明け方)になるという変則的でストレスの大きい日程に対応できるよう、機内での過ごし方(睡眠、食事のタイミングなど)、経由地での活動などを選手が事前に把握できるように情報共有を行った。現地入りしてからは、種目ごとの担当コーチと帯同したトレーナー3名、ドクター1名が連携をとりながら、選手のコンディションング全般のサポートを行った。</p>	<p>光州(2015) ハーフマラソンのみ出場の選手8名とコーチ1名を除いた37名が7月4日に品川に集合し、選手団としての準備を行い、翌7月5日の朝(8時30分発)に羽田空港より韓国・金浦空港へ空路移動(約2時間半)し、そこからバスにて陸路光州まで約4時間半かけて選手村に到着という流れであった。選手村到着は夕方5時頃であったが、早朝のホテル出発ということもあり、選手はさすがに疲労していた様子であった。 今回の海外遠征の経験者はいたもののユニバーシアードへの出場経験者はおらず、多少の緊張があったようにも感じた。 選手村からの移動手段としてシャトルバスが15分間隔で発着という設定のため、比較的使用しやすく目的地へ赴くことができた。公表としてはバスで約6~7分程度ということであったが、道路状況によっては20分以上かかる場合も想定された。また、投てき練習場として近くの高等</p>	<p>台北(2017) 陸上競技の第一陣として選手28名、役員12名が8月19日に品川に集合し、翌20日に成田空港からJL805便(11:15発-14:05着)で台湾桃園国際空港に向けて移動した。選手村に着いたのは現地時間で17時頃であったが、半数の選手は時差調整(時差は-1時間である)と移動後の体調を整えるために選手村内の陸上競技場で軽く身体を動かす等の調整練習を行った。陸上競技の場合、移動した日から2~3日の余裕を持たせることで選手は現地の気候や生活環境に馴化してくると捉えられている。今回は比較的日本から移動時間が少ないことと時差があまりないことで2日の馴化日数で十分と考えられた。その後夕食をとったがダイニングホールまではかなりの時間歩く配慮ではあった。また、ダイニングホールではバイキング形式なため、各自栄養や摂取量等に留意するよう指示が出された。チーム荷物が今回棒高跳用のポール、やりといった特別な器具も含まれたため、荷物受け取りと確認には多くの時間が必要であった。しかし、特段大きな問題はなく受け取ることができた。 8月21日(月) 6:00からの長距離は朝練習が行われ、それ以外の種目の選手はおおむね7時半から8時を目安に朝食をとり、9時にメインスタジアム横のサブトラックに向けて出発した。所要時間は約50分であった。臨時のバス運行が提示されたことで試合会場のスタジアムに行ったがそこでは使用不可といわれ、半数以上の選手がスタジアムから各公式練習会場(トラック練習会場、投擲練習会場)へその後移動して調整練習を行った。跳躍ブロックは残り、再度交渉してウォームアップエリアでの練習が出来ることになり、そこで約2時間の調整練習を行った。17:00にはテクニカルミーティングが選手村内インターナショナル・ホールで2時間程度、開催されスタッフ2名が参加した。 8月22日は競技開始前日ということでスタジアムが午後、解放された。そこでの調整練習には短距離種目の選手が参加し、スタートでの号砲に合わせた練習を行うことが出来た。また長距離種目の選手もスタジアムでの走路の硬さなどの確認とスピード練習を行うことが出来た。 全体的に選手の試合会場への移動時間がシャトルバスで約50分かかり、時間帯によっては1時間以上かかることから選手は各自の出場種目に合わせて計画的に余裕を持って行動予定を立てる必要があった。特に予選からのラウンドをこなす選手にとっては午前のセッションに調子を合わせなければいけないラウ</p>
--------------------------------	---	---	---	--

	<p>ク、競技場に分かれて、トレーナーへの対応が出来る準備をして選手の要望に応えた。高温多湿の環境下ではあったが、様々な場所にミネラルウォーター、氷が用意されていて有効に活用することができた。</p>	<p>学校およびブンガムスポーツセンターといった場所が割り当てられていた。さらに全大会とは異なり、サブトラックは屋外でのウォームアップ場ということで、その後、台風による風雨によって一時使用不可能になるという事態に悩まされていた。</p> <p>7月6、7日の両日では、選手は概ね、午前中に練習を行い、天候が下り坂気味であるという情報から前倒して試合への調整を行っていた。前回大会では、試合前のテクニカルミーティングにアシスタントスタッフ（現地ガイドのような人）がついてくれ、実際の細かい部分での問い合わせなどが詰められたが、今回のJOC本部から一人アシスタントスタッフとしてついていただくことができたことは良かった。</p>	<p>ンドと夜のセッションに合わせなければいけない2パターンの調整を余儀なくされるというタイムテーブルであった。そのため、午前のセッションで試合があり次の日の午後でのセッションで試合があるといった場合は、直ぐに調整の方法を変え、次のラウンドに適応させるには大きな身体的、精神的な疲労を伴うものであった。したがって、トレーナーを選手村、スタジアムに配置して、どちらでも身体的、精神的なケアが施せるよう人的配置を行った。</p> <p>また、スタジアム隣接のウォーミングアップエリアでのテントを3張分、確保し、そこでトレーナーベッド、ヨガマットの代用マットを敷き、選手がストレッチ、休息に十分な環境を用意して活用させた。日本の気候と比べて台湾の気候は湿度、気温ともに高いことから脱水予防の経口補水液を絶えず用意して選手に摂取するよう指導した。</p> <p>各選手はそれぞれの公式練習会場と選手村内の競技場を出来るだけ上手く活用し、移動などでの疲労や時間の調整を努めるとともに選手村内での食事もバランス良く摂取することに留意させた。試合当日は、捕食となるような携帯食や、ゼリー等の活用を勧めた。また、試合の構成が午前、午後(夕方から夜)の2セッションとなる試合形式にいち早く順応できるよう選手には喚起した。</p> <p>(補足：8月22日(火) 6:00 から長距離は朝練習を開始した。その他の選手は7時半から8時を目安に朝食をとり各ブロックでの練習のため移動していった。短距離、長距離の女子選手はこの日は16時から18時までメインスタジアムでの練習が許されたためその時間に合わせて選手村での調整後移動した。短距離の男子は公式練習会場の方でトレーニングを行った。この場所も選手村からは約50分を要する場所であった。また、第二陣の競歩選手3名、スタッフ1名が11:15発(JL805便)で定刻通り成田を出国し、台北(桃園国際空港)に14:05到着した。その後、専用バスにて選手村へ15:00頃到着し、チームに合流した。その後、調整練習を行い、試合に向けて各自コンディションを整えた)</p>
--	--	--	--

4. 試合経過と戦評	深セン(2011) 8月16日(火)～ 8月21日(日) 注) 競技成績参照	カザン(2013) 7月7日(日)～ 7月12日(土) 注) 競技成績参照	光州(2015) 7月8日～ 7月12日 注) 競技成績参照	台北(2017) 8月23日(水)～ 8月28日(月) 注) 競技成績参照
5. 競技の総評と反省	<p>本大会のチーム編成は、親切された男女ハーフマラソン団体をメインに過去の実績から短距離・リレー・長距離・マラソン種目に重点を置いたチーム編成で臨んだ。</p> <p>結果は、金3、銀3、銅3、合計メダル数は9個、入賞者8名という成績であった。長距離・マラソンにおいては過去の経験を生かして暑さ対策、水分補給と十分な準備を整えて臨み、男女10000mから好成績を挙げ、男女ハーフ</p>	<p>日本が獲得したメダルは、金メダル3、銀メダル4、銅メダル5の合計12個で、陸上競技においてロシアに次いで2番目となり、その数は過去最多タイとなった。メダル数が多かったことに加えて、特に今回は核となる選手が期待通りの結果を残せたことも大きな成果といえる。男子では短距離、投擲、ハーフ</p>	<p>今大会は前回大会に比べて日本からも近く、気候もさほど変わらず時差もなしと環境には申し分なかったと言える。しかし台風が接近してくる状況で試合が展開されたことや宿舎がその後売却される一般の高層マンションのためエレベーターの込み具合や、コインランドリーの数の少なさ、トイレの水回り等、不自由なことは多々あった。</p> <p>しかし、最終的には金メダル4個、銀メダル3個、入賞13と陸上競技の国別対抗順位はロシアに次いで総合で2位という結果であった。これ</p>	<p>全体的には出場選手が前回の大会から6名増加の体制で台北ユニバーシアードに臨んだものの、怪我で不出場となった2名を差し引くと実質、4名の純増という形のチーム編成であった。ここで2名の怪我による不出場者で1名は出場辞退ということで帯同せず、もう1名はチームに帯同し、最終判断を現地でドクター、トレーナー、スタッフで行い、出場を取りやめた。</p> <p>総合力という観点をメダルの数で評価していくと金メダル7、銀メダル2、銅メダル7、総計16個は史上最多の獲得数であった。前回大会と比較すると金は3増、銀1減、銅2増、総計4増という内訳であった。さらに入賞者数をみると前回大会は13、今回は10種目で3減であった。メダル獲得数と入賞者数を総計すると今回は26、前回は27、前々回26とほぼ同数である</p>

マラソンにおいては団体戦術を徹底させて2つの金メダルを獲得した。コーチ陣並びにその作戦をバックアップしていただいたドクター・トレーナー諸氏には深く感謝の意を表す。また、個人を抑え、見事に期待に応え、全員入賞を果たした選手各位に敬意を表す。

一方、今シーズンの春先からのシニア(チームジャパン)を脅かす活躍をした短距離・リレーチームは、両リレー、400mH でメダル獲得を狙ったが、結果は 400mH、4 × 400mRno 両銀メダルのみで終わったのは誠に残念ではない。特に 4 × 100mR の失敗は2大会連続となり、責任を痛感する。短距離陣を中心にやや春先のシーズンインからヒートアップして、ピーキングがずれたとしかいいようがない。連続する主要大会へのコンデショニングの重要性を改めてかんがえさせられる結果であった。

今大会はオリンピックの前年、ユニバーシアードと世界選手権の開催国が隣接、高温多湿という条件の中、全体的にレベルの高い競技大会であった。今大会の成功体験を生かし、また苦い体験をよくよく吟味し、今後のビッグ大会に生かし、さらなる向上を期したいと考える。

マラソンを中心に活躍をみせ、リレーにおいてもメダルを獲得できたことは今回のコーチングスタッフの手腕が評価される結果といえる。また、女子長距離種目での津田、鈴木の金メダルは本人たちの努力はもちろんだが、日本学生女子長距離界のレベルの高さを示すことができたともいえる。

しかし、全体を振り返れば、取りこぼしともいえる結果もあり、必ずしも全員が 100%の力を出し切れた大会とは言いきれない。決勝での自己記録やシーズンベストが少なかった点は、この大会に臨む競技会スケジュールの中でのピーキングの重要性を再認識する必要性を示すものである。それでも今回は厳しい移動日程の中で現地入りしたにもかかわらず、コンディションを大きく崩す者もなく全員が元気に競技に臨めたことは頼もしさも感じさせられた。もっと体調を管理しやすい移動ができていれば、また違う結果もあったのではないかと悔いが残る。

らの好結果は、選手選考について何度も手直しをし、何度も選考会議を設け適正な選手選考がなされたことに加え、現地での選手のパフォーマンス発揮のための環境づくりが適正に行われたことの証かもしれない。

問題点として出場枠の変更不可という条件がある中での選考という形は取捨選択を迫られる部分があり、いつもながら結果論だけで評価をしてしまう部分である。競歩でどこかの枠を充当し3人出場していれば団体でのメダルも確実であったかもしれない・・・等々、今後の課題としては突き詰めなければならない面もある。

これらはさておき、この遠征を成功裏に導いたのは、選手自身はもとよりJOC本部、現地スタッフの柔軟かつ迅速な競技環境への対応がなされていることが大きな要因として見紛う余地はない。チームジャパンとして自由度も持ち合わせながら礼節や自覚を持った選手達の立ち振る舞いは、他国・地域の関係者へも誇れるものであった。

この遠征は前回に比べて厳しい戦いになると予想されていたにもかかわらず、前回以上の金メダルの獲得をはじめ、好成績となり、JOC本部の鈴木大地団長も視察の際、大いに納得されている様子であった。この遠征に関し全面的な支援をいただいたJOCの関係各位に厚く御礼をもうしあげる次第である。さらなる活躍を目指した永続的、かつ活発な活動になるよう引き続きご支援を賜りたくお願い申し上げたい。

ことがわかる。このことは決勝に残り、8位以内の質を3大会連続して担保しているということであり**派遣標準記録の適正な設定から選考の妥当性を実証している**ものであると考えられる。さらに今回の好成績は入賞者の中でより成績が上位に上がってきたことによるメダル獲得数の増加であることを本質として理解していく必要がある。より上位の成績を残すことが出来た理由としては、まず**事前合宿**などによる戦略や戦術の綿密な**計画の立案および吟味、そして実行というプロセス**を作ることができたことによる。短距離、長距離、投擲といった種目群が直前合宿で味の素 NTC を上手く利用できたことでその作業はとてスムーズに執り行うことが出来た。第二の理由としては**現地に入ってから**役員などのスタッフでの役割を上手く分掌し機能的に活動できたことが挙げられる。これはこれまでの帯同経験が豊富なスタッフを中心に各場所への移動や配置が適正になされ、選手のトレーニング環境や試合環境の十分なフォローアップが可能であったことで選手は非常にリラックスかつ集中した状況をつくることができたと考えられる。今回は今までの大会以上にタイムテーブルの変更やプログラム内での出場の組やレーンの変更が直前になって行われたり、選手村からの移動が長時間であったり、公式練習会場への移動も遠距離なうえ、メインスタジアムから公式練習会場へのシャトルバスが運行されていないこと、競歩、ハーフマラソンの競技会場からもメインスタジアムまでの運行もないことなど、多くの困難が生じていた。その中でもスタッフの機転と問題解決能力の高さで恙なく競技できたということも大きな要因かも知れない。

今後、さらなる成績の向上を図る上で必要なことは選手個々の実力を向上させることは最優先課題であるが、**実際はその所属先でのトレーニングの充実と競技会での結果なくしては望まれるものではない**。個々の力を最大限、大きな試合で発揮させることが出来るよう各所属大学に求めていく活動は必要である。それに先だつて**選考選手の増枠をすること**でさらに活躍できる選手も増加してくると想像される。そこには綿密な**派遣標準記録の設定と選考を平等性を担保しながらも戦略的に行っていく必要がある**と考えられる。

<p>6. 選手村の生活</p>	<p>深セン(2011) 出発前の情報から不十分な生活が予想されていたが、現地では意外と快適な生活を過ごすことができた。バラエティに富んだ食堂のメニュー、暑さを忘れさせるほどのエアコン完備の部屋、機能的な配置の選手村など生活上の不便さはほとんど感じさせないほどであった。ただし、今回もレンタル機器がなかったため備品面での不便さはあった。連絡用のホワイトボードや、電子レンジくらいは用意されたものが使えたと良かった。大会前半は混雑があったシャトルバスも後に解消されて特に問題はなかったが、臨時のバス(道路競技会場行)の時はドライバーが行先を正確に知らない時もあり戸惑う時もあった。 大会を通じて、多くのボランティアスタッフには様々な面で力になっていただいた。24時間対応でコピー1枚からハーブマラソンコース下見の案内まで、いつも笑顔で丁寧に対応していただき感謝している。</p>	<p>カザン(2013) 選手村での生活は全般的には快適であった。当然ではあるがホテルのようなルームサービスはないもの、ことからの細かな要望にも丁寧に対応していただいた。エレベーターの不調やシャワールームの給排水の苦情に対しても担当者がその度に改善の努力をしてくれた。豊富なメニューのレストランは約2週間の滞在でも食べ飽きないほどであったが、開いていない時間帯もあり、競技前の食事施設として必ずしも十分ではなかった。村内で電子レンジの貸し出しがあったにもかかわらず、競技直前の食事のための加工済み(衛生管理させている)の食品が持ち込めなかったことにも不満が残る。居住面以外では帯同したトレーナーの活動スペースについて事前に情報が少なく、今回も現地で場所を確保することに苦心した。各競技団体の部屋割に余裕があれば、より機能的なミーティングができたように思う。大会を通じて他面にわたり日本オリンピック委員会をはじめ、関係の皆様を支えられての毎日であった。この経験を選手、役員は次のステップとして活かすことが何よりの責務であると感じている。また、親切で献身的なボランティアが常に協力的に行動してくれたことには毎日関心させられた。この場を借りてすべての皆様に感謝申し上げたい。 (編注)10月8日、女子5000m1位の選手がドーピング違反により失格。その結果、同種目3位の鈴木亜由子が2位、同4位の荘司麻衣が3位となった。(本部関係資料24参照)</p>	<p>光州(2015) 選手村での日本チーム全競技の選手、スタッフ役員の宿泊は1棟のマンションに集約されていた。エレベーターが1基のみということで地階までの移動に思った以上の時間が掛かってしまった。最上階は27階であり、そこからの移動はかなり余裕を持って動きださなければならぬという状況であった。また、部屋は土足禁止となっていたが、日本チームにとってはかえって心地よかったかもしれない。トイレの水の流れが悪いなどの注意点もあり、再三注意を促してはいたものの1部屋では水詰まりが起きてしまった。またダイニングホールでの食事は前回大会での内容より種類が少なかったと感じる。選手も幾分、食事のレポートリーへの欲求はあったようである。 選手村からの移動手段としてシャトルバスが15分間隔で発着という設定のため、比較的に利用しやすかった。公表としてはバスで約6~7分程度というところであったが、道路状況によっては20分以上かかる場合もあった。それに加えてメインスタジアムに隣接している大型アウトレットモールへの観光、ショッピングへの利用にもシャトルバスが使われており、競技が終わった他国の選手が多く利用していた。それによって選手の試合への移動は予定通りいかないこともあった。 また、変更事項が起きた際、アシスタントスタッフの人達に迅速に対応してもらえたことは幸いであった。 今大会ではチームドクターはMER(中東呼吸器症候群)の懸念に加えてドーピング検査対応と、かなり負担は大きかったと考えられる。陸上競技の全種目をカバーすることはタイムテーブルが朝早くから夜遅くまで展開されているためである。 選手団本部との連絡は概ね総務が担当し、不手際な部分はあったものの、連絡が密にできており、順調な伝達、相談ができたと考えられる。</p>	<p>台北(2017) 選手村からメインスタジアムまでシャトルバスで片道約50分を要したことから陸上競技の試合形式が午前セッションと夜セッションの2部構成であるため、スタッフはメインスタジアムと選手村を1日2往復しなくてはならない日があった。練習や試合時間よりも移動時間が長い日があった。選手村での食事においてバリエーションは少なかったものの、問題なく摂ることが出来た。滞在日数が多くなれば食事メニューのマイナーチェンジはあったものの真新しさが求められる。 宿舎としてはとても快適であったがリビングには空調設備がない状態であり扇風機などで各部屋の冷気を送るなどの工夫をした。また、タオル交換が予定通りに行われない日があり、宿舎のカウンターにお願いしに行くことがあった。ランドリーも十分であったが乾燥機は全体で3台しかなく、使うことはなかった。部屋で干すことで問題はなかったが、バランスがとれれば良かった。 長距離選手1名が現地入りした明朝から腹痛、下痢、発熱の症状を発症し、医療診察を受けて感染性の疑いがあり、隔離部屋に移動した。最終的にその選手はレースに出場することができ、完走した。</p>
------------------	--	---	---	---

出所：JOC 報告書(2011年、2013年、2015年、2017年)

資料4 選考基本方針等の推移 (2011年、2013年、2015年、2017年)

開催年 回数 開催都市 大会期間 (陸上) 主体 基本方針の公表日	2011年 第26回 深セン (無記入) 日本学連 ・2011. 1. 21 ・改訂版 4. 1: 東日本大震災のため	2013年 第27回 カザン 7月7日～12日 日本学連 ・2012. 12. 8	2015年 第28回 光州 (無記入) 日本学連 ・2015. 1. 30	2017年 第29回 台北 (無記入) 日本学連 ・2017. 6. 5	備考
選考基本方針	<p>① 強化委員会が設定した標準記録を突破している者を選考対象とする。</p> <p>② 長距離種目以外はひとつの選考競技会を指定せず、複数の競技会での成績を基に選考する。ここでの長距離種目とは、男女5000m、男女10000m。またこれらの長距離種目においては指定選考競技会以外の成績は選考資料としなが、一部例外(米)を認める。※例外は、2011年世界陸上標準記録突破者のことを指す。</p> <p>③ ハーフマラソン代表は選考競技会(10000m)の上位2名を基本的に候補に内定する。3位以下の競技者および、他の競技会の成績および過去のハーフマラソンの成績を考慮し、さらに2名を選考する(今回から団体の部が新設)。</p> <p>④ 標準記録を複数回、突破している者を優先することがある。</p>	<p>① 強化委員会が設定した標準記録突破者※。および指定選考競技会出場者を選考対象とする(一部)例外あり※)。※例外として、2013年世界陸上参加標準記録Aを突破している学生競技者は指定競技会に出場していない場合でも選考対象とする。</p> <p>② 長距離種目以外はひとつの選考競技会を指定せず、複数の競技会での成績を基に選考する。ここでの長距離種目とは、男女5000m、男女10000m、男女ハーフマラソン、男女20km競歩とする。</p> <p>③ 団体戦のある男女ハーフマラソンは日本学生ハーフマラソンの上位3名を候補に内定し、4位は補欠とする。4人目の候補はIV. 選考基準2. の基準により選考する。</p>	<p>① 強化委員会が設定した標準記録を突破している者を選考対象とする。</p> <p>② 長距離種目以外は複数の選考競技会での成績を基に選考する。</p> <p>③ 長距離種目は(男女5000m、男女10000m、男女ハーフマラソン、男女20km競歩)は指定選考競技会以外の結果以外は選考資料としないが一部例外を認める。また道路競技においての標準記録は原則として扱う。※例外とは、2015年世界陸上標準記録突破者のことを指す。</p> <p>④ ハーフマラソン代表は日本学生ハーフマラソンの上位3名を基本的に内定し、4位は補欠とする。この補欠はハーフ上位3名に対してとし、4人目の候補はこの補欠を含めて春季の選考競技会の結果から選考する。ハーフマラソンは団体の部(上位3名の成績により順位づけ)でのメダル獲得も目指す。</p> <p>⑤ 長距離、競歩以外は標準記録を複数回、突破しているものを優先することもある。</p>	<p>① 強化委員会が設定した標準記録を突破している者を選考対象とする。</p> <p>② 長距離種目、混成競技以外は日本学生陸上競技個人選手権大会の成績を基に選考する。</p> <p>③ 長距離種目は(男女5000m、男女10000m、男女ハーフマラソン、男女20km競歩)は指定選考競技会以外の結果以外は選考資料としないが一部例外を認める。また道路競技においての標準記録は原則として扱う。※例外とは、2017年世界陸上標準記録突破者のことを指す。</p> <p>④ ハーフマラソン代表は日本学生ハーフマラソンの上位3名を基本的に内定し、4位は補欠とする。この補欠はハーフ上位3名に対してとし、4人目以降の候補はこの補欠を含めて春季の選考競技会の結果から選考する。ハーフマラソンは団体の部(上位3名の成績により順位づけ)でのメダル獲得も目指す。</p>	

<p>I. 選考競技会</p> <p>(注：具体的な競技会名は割愛します)</p>	<p>1. ハーフマラソン 2. 競歩 3. 長距離種目 4. 一般種目：(上記以外の種目、中距離を含む)</p>	<p>1. 一般種目(長距離、ハーフマラソン、競歩以外の種目) 2. 長距離種目(男女 5000m、男女 10000m、男女ハーフマラソン4人目) 3. ハーフマラソン 4. 競歩</p>	<p>1. ハーフマラソン 2. 競歩 3. 長距離種目 4. 一般種目(上記以外の種目、中距離を含む)</p>	<p>1. ハーフマラソン 2. 競歩：略 3. 長距離種目 4. 一般種目：(上記以外の種目、中距離を含む)</p>
<p>II. 選考条件</p>	<p>1) 2011 年度日本学連登録競技者を選考対象とする。(日本学連・学生競技者資格に関する規程第3条参照)ただし、ハーフマラソン、競歩に関しては2010年度卒業生および修了生も選考対象となる。</p> <p>2) 強化委員会が過去のユニバーシアード競技結果をもとに設定した標準記録(VI. 2011ユニバーシアード標準記録参照)を突破していることが前提条件である。</p> <p>3) 派遣枠数については、派遣団体である日本オリンピック委員会(JOC)により決定される。日本学連は、標準記録を突破している競技者の中からJOCの示す派遣枠内の代表選手を推薦する。ハーフマラソンおよび競歩に関しては最大5名のエントリーが認められているが、他の一般種目は1種目2名以内と定められている。</p> <p>4) 代表選手は、日本学連の理事会の承認を経て、JOC理事会(6月下旬)にて正式決定する。</p>	<p>1) 2013 年度日本学生陸上競技連合普通会員、JOCよりの通達で社会人は対象としない。</p> <p>2) 強化委員会が設定した標準記録を突破していること。</p> <p>3) 派遣人数は、JOCにより決定される。ハーフマラソン・競歩以外の種目は、1種目2名以内。</p> <p>4) 代表選手は、選考委員会(米下段参照)によって選考を行い、本理事会の承認を経て、JOC理事会が決定する。</p>	<p>1) 2015 年度日本学連登録競技者を選考対象とする。(日本学連・普通会員の資格に関する規程参照)なお、ハーフマラソン、競歩に関しては主要選考競技会が前年度に開催されるが、2014年度卒業生および修了生は選考対象外となる。</p> <p>2) 強化委員会が過去のユニバーシアード競技結果をもとに設定した標準記録(VI. 2015ユニバーシアード標準記録参照)を突破していることが前提条件である。</p> <p>3) 派遣枠数については、派遣団体である日本オリンピック委員会(JOC)により決定される。日本学連は、標準記録を突破している競技者の中からJOCの示す派遣枠内の代表選手を推薦する。ハーフマラソンおよび競歩に関しては最大5名のエントリーが認められているが、他の一般種目は1種目2名以内と定められている。</p> <p>4) 代表選手は、日本学連の理事会の承認を経て、JOC理事会にて正式決定する。</p>	<p>1) 2017 年度日本学連登録競技者を選考対象とする。(日本学連・普通会員の資格に関する規程参照)但し、日本国籍を有し海外の大学に留学をしている場合はこの限りではない。なお、ハーフマラソン、競歩に関しては主要選考競技会が前年度に開催されるが、2016年度卒業生および修了生は選考対象外となる。</p> <p>2) 強化委員会が過去のユニバーシアード競技結果をもとに設定した標準記録(VI. 2017ユニバーシアード標準記録参照)を突破していることが前提条件である。</p> <p>3) 派遣枠数については、派遣団体である日本オリンピック委員会(JOC)により決定される。日本学連は、標準記録を突破している競技者の中からJOCの示す派遣枠内の代表選手を推薦する。ハーフマラソンおよび競歩に関しては最大5名のエントリーが認められているが、他の一般種目は1種目2名以内と定められている。</p> <p>4) 代表選手は、日本学連の理事会の承認を経て、JOC理事会にて正式決定する。</p> <p>5) 原則として、2017日本学生陸上競技個人選手権大会に出場し、特に優れた成績を収めた者を選考の対象とするが、国際試合等(IAAF関連の大会、日本代表選手)に出場するため選考競技会に出場できない場合、競技実績や記録等から代表選手として選考することがある。</p>

<p>Ⅲ. 標準記録有効期限</p>	<p>1) ハーフマラソン 男子：2010.1.1～2011.3.13 女子：2010.1.1～2011.3.20 2) 競歩： 男子・女子 2010.1.1～2011.3.13 3) 一般種目 2010.9.1～2011.6.19 (個人選手権まで) (JOC へのエントリー締切の関係)</p>	<p>1) ハーフマラソン 男子：2012.1.1～2013.3.10 女子：2012.1.1～2013.3.17 2) 競歩 男子・女子： 2012.1.1～2011.3.10 3) 一般種目 2012.4.1～2013.5.5</p>	<p>1) ハーフマラソン 男子：2014.1.1～2015.3.1 女子：2014.1.1～2015.3.15 2) 競歩： 男子・女子 2014.1.1～2015.3.15 3) 一般種目(上記以外) 男子・女子 2014.4.1～2015.5.17 (JOC へのエントリー締切の関係)</p>	<p>1) ハーフマラソン 男子：2016.1.1～2017.3.5 女子：2016.1.1～2017.3.19 2) 競歩：男子・女子 2016.1.1～2017.3.19 3) 一般種目(上記以外) 男子・女子 2016.4.1～2017.6.11 (JOC へのエントリー締切の関係)</p>
<p>Ⅳ. 選考基準</p>	<p>1. ハーフマラソン 1) 標準記録を突破し、第 59 回兵庫リレーカーニバルでの代表選考競技会(10000 m)に出場した競技者の中から本大会での活躍が期待できる競技者を代表選手とする。 2) 5000 m・10000m 代表選考競技会の競技成績とハーフマラソン代表選考競技会の競技成績および地区インカレの競技成績により代表選手を追加することがある。</p> <p>2. 競歩 標準記録を突破し、代表選考競技会に出場した競技者の中から本大会で活躍が期待できる競技者を代表選手とする。</p> <p>3. 上記(ハーフマラソン、競歩、リレー)以外の種目 標準記録を突破した者のうちから選考会における競技成績により本大会で活躍が期待できる競技者を代表選手とする。</p> <p>4. リレー種目 リレーチームの派遣は、リレーに関連する個人種目の競技成績からメンバーを選考し、チーム編成を行う。</p>	<p>1. 本大会において入賞が期待できる競技者を代表選手とする。</p> <p>2. 選考競技会の 5000 m・10000 m の競技成績より、ハーフマラソン代表選手を追加することがある。</p>	<p>1. ハーフマラソン 1) 標準記録を突破し、第 18 回日本学生ハーフマラソン選手権大会および第 18 回日本学生女子ハーフマラソン選手権大会において上位に入賞した者の中から本大会での活躍が期待できる競技者を代表選手とする。 2) 選考競技会の 5000 m、10000m の競技成績と第 18 回日本学生ハーフマラソン選手権大会および第 18 回日本学生女子ハーフマラソン選手権大会の記録により代表選手を追加することがある。</p> <p>2. 競歩 標準記録を突破し、第 9 回日本学生 20km 競歩選手権大会において上位入賞した者の中から本大会で活躍が期待できる競技者を代表選手とする。</p> <p>3. リレー種目 リレーチームの派遣は、リレーに関連する個人種目の競技成績を基にし、チーム編成・種目の兼ね合い等を考慮して、選考を行う</p> <p>4. 上記(ハーフマラソン、競歩、リレー)以外の種目 標準記録を突破した者のうちから選考会における競技成績により本大会で活躍が期待できる競技者を代表選手とする。</p>	<p>1. ハーフマラソン 1) 標準記録を突破し、第 20 回日本学生ハーフマラソン選手権大会および第 20 回日本学生女子ハーフマラソン選手権大会において上位に入賞した者の中から本大会での活躍が期待できる競技者を代表選手とする。 2) 5000 m、10000m の選考競技会の結果、およびハーフマラソン選考競技会の結果から代表選手を追加することがある。その場合、女子はハーフマラソン選考競技会出場者のみを選考対象とする。</p> <p>2. 競歩 標準記録を突破し、第 11 回日本学生 20km 競歩選手権大会において上位入賞した者の中から本大会で活躍が期待できる競技者を代表選手とする。</p> <p>3. リレー種目 リレーチームの派遣は、リレーに関連する個人種目の競技成績を基にし、チーム編成・種目の兼ね合い等を考慮して選考を行う。なお、概ね関連する種目の標準記録を目安とする競技成績をもってリレーメンバーを選考する。</p> <p>4. 上記(ハーフマラソン、競歩、リレー)以外の種目 標準記録を突破した優勝者・準優勝者で、本大会での入賞が期待できる競技者を選考する。ただし、派遣標準記録を突破しても選考されない場合がある。</p>

V. その他	6月の2011日本学生陸上競技個人選手権大会は最終選考会とはしない。 候補選手として選抜された後に本大会までに故障などのために競技力を十分に発揮できないと強化委員会が判断した場合には内定を取り消す。	< 無記入 >	候補選手として内定された後に本大会までに故障などのために競技力を十分に発揮できないと強化委員会が判断した場合には内定を取り消す。	候補選手として内定された後に本大会までに故障などのために競技力を十分に発揮できないと強化委員会が判断した場合には内定を取り消す。	
VI. ユニバーシアード標準記録	< 深セン : 2011年 >	< カザン : 2013年 >	< 光州 : 2015年 >	< 台北 : 2017年 >	
< 種目 >	男子 女子	男子 女子	男子 女子	男子 女子	
100m	10.45 11.70	10.40 11.70	10.40 11.70	10.40 11.70	
200m	21.00 23.75	21.00 23.90	20.85 23.90	20.85 23.90	
400m	46.30 53.00	46.50 53.50	46.50 53.50	46.50 53.50	
800m	1:48.00 2:03.00	1:48.00 2:03.00	1:48.00 2:03.00	1:48.00 2:03.00	
1500m	3:43.00 4:15.00	3:43.00 4:15.00	3:43.00 4:15.00	3:43.00 4:15.00	
5000m	13:50.00 16:10.00	13:50.00 16:10.00	13:45.00 16:00.00	13:43.00 16:00.00	
10000m	28:50.00 34:00.00	28:50.00 34:00.00	28:50.00 34:00.00	28:50.00 34:00.00	
ハーフマラソン	1:04:00 1:13:00	1:04:00 1:15:00	1:04:00 1:13:00	1:04:00 1:13:00	
110mH / 100mH	13.75 13.30	13.85 13.30	13.85 13.30	13.85 13.30	
400mH	49.80 57.00	50.00 57.20	50.00 57.20	50.00 57.20	
3000mSC	8:40.0 10:00.0	8:40.0 10:05.0	8:40.0 10:05.0	8:40.0 9:50.0	
20km 競歩	1:28:00 1:40:00	1:26:00 1:38:00	1:25:00 1:36:00	1:24:00 1:36:00	
400mR	— —	— —	— —	— —	
1600mR	— —	— —	— —	— —	
走高跳	2m21 1m86	2m21 1m86	2m21 1m86	2m21 1m84	
棒高跳	5m40 4m20	5m40 4m20	5m40 4m20	5m40 4m20	
走幅跳	7m80 6m40	7m80 6m40	7m80 6m40	7m80 6m30	
三段跳	16m60 13m70	16m60 13m70	16m60 13m70	16m50 13m60	
砲丸投	18m30 15m50	18m30 15m50	18m30 15m50	17m70 15m50	
円盤投	57m00 54m00	57m00 54m00	57m00 54m00	57m00 54m00	
ハンマー投	70m00 64m00	70m00 64m00	70m00 64m00	68m00 63m50	
やり投	74m50 54m50	74m50 54m50	74m50 54m50	75m50 55m00	
十種 / 七種競技	7800点 5700点	7700点 5700点	7700点 5700点	7600点 5700点	
VII. 代表選手選考委員会	< 無記入 >	委員会(構成) 10名	< 無記入 >	< 無記入 >	

出所 1) 公益社団法人日本学生陸上競技連合(2011) 第26回ユニバーシアード競技大会 (2011 / 深セン) 日本代表選手選考について[改訂版]、会報130号
 2) 公益社団法人日本学生陸上競技連合(2012) 第27回ユニバーシアード競技大会 (2013 / カザン) 日本代表選手選考について、HP(2012.12.8)
 3) 公益社団法人日本学生陸上競技連合(2015) 第28回ユニバーシアード競技大会 (2015 / 光州) 日本代表選手選考について、HP(2015.1.30)
 4) 公益社団法人日本学生陸上競技連合(2017) 第29回ユニバーシアード競技大会 (2017 / 台北) 日本代表選手選考について[改訂版]、HP(2017.6.5)

資料5 競技結果(2011、2013、2015、2017)

第26回ユニバーシアード競技大会(2011/深圳) 日本選手団(陸上競技)結果

	氏名	所属	種目	ラウンド								コメント
				予選(1次)		予選(2次)		準決勝		決勝		
				着順	記録	着順	記録	着順	記録	着順	記録	
男子	小谷 優介	立命館大学	100m	5組1着	10.43(+0.3)	2組3着	10.43(+0.1)	2組8着	10.52(-0.8)	—	—	準決勝敗退
	川面 聡大	中央大学	100m	1組2着	10.46(-0.1)	1組4着	10.43(-0.1)	1組7着	10.43(±0.0)	—	—	準決勝敗退
	飯塚 翔太	中央大学	200m	6組2着	21.25(+0.1)	3組1着	21.08(±0.0)	1組5着	21.02(-0.1)	—	—	準決勝敗退
	山縣 亮太	慶應義塾大学	200m	8組2着	21.47(-0.3)	2組4着	21.17(-1.0)	2組7着	21.15(±0.0)	—	—	準決勝敗退
	廣瀬 英行	慶應義塾大学	400m	3組2着	47.36	—	—	2組5着	47.07	—	—	準決勝敗退
	中野 弘幸	愛知教育大学	400m	6組2着	47.08	—	—	3組4着	46.61	—	—	準決勝敗退
	油布 郁人	駒澤大学	5000m	2組6着	14.18.87	—	—	—	—	14着	14.38.29	決勝進出
	鎧坂 哲哉	明治大学	10000m	—	—	—	—	—	—	5着	29.32.21	決勝第5位
	大迫 傑	早稲田大学	10000m	—	—	—	—	—	—	1着	28.42.83	金メダル
	矢澤 航	法政大学	110mH	1組4着	14.01(+0.2)	—	—	2組5着	13.97(+0.2)	—	—	準決勝敗退
	岸本 鷹幸	法政大学	400mH	3組1着	51.29	—	—	1組1着	49.53	2着	49.52	銀メダル
	安部 孝駿	中京大学	400mH	5組1着	51.27	—	—	3組4着	50.96	—	—	準決勝敗退
	戸邊 直人	筑波大学	走高跳	B組 12位	2m00	—	—	—	—	—	—	予選敗退
	笹瀬 弘樹	早稲田大学	棒高跳	B組 6位	5m30	—	—	—	—	11位	5m20	決勝第11位
	ディーン元気	早稲田大学	やり投	A組 4位	75m91	—	—	—	—	12位	73m44	決勝第12位
	佐藤 寛大	仙台大学	やり投	B組 8位	67m47	—	—	—	—	—	—	予選敗退
	出岐 雄大	青山学院大学	ハーフマラソン	—	—	—	—	—	—	6着	1.07.34	決勝第6位
	矢澤 曜	早稲田大学	ハーフマラソン	—	—	—	—	—	—	7着	1.08.03	決勝第7位
	攪上 宏光	駒澤大学	ハーフマラソン	—	—	—	—	—	—	4着	1.06.38	決勝第4位
	早川 翼	東海大学	ハーフマラソン	—	—	—	—	—	—	3着	1.06.25	銅メダル
団体	—	ハーフマラソン	—	—	—	—	—	—	1位	3:20.37	金メダル	
青野 大地	山梨学院大学	20kmW	—	—	—	—	—	—	18着	1:32.00	決勝第18位	
山縣、小谷、川面、飯塚	—	4×100mR	2組	失格	—	—	—	—	—	—	予選敗退	
中野、堀江、廣瀬、安部	—	4×400mR	1組1着	3.08.02	—	—	—	—	2着	3.05.16	銀メダル	
女子	市川 華菜	中京大学	100m	3組2着	11.90(+0.2)	4組6着	12.00(-0.1)	—	—	—	—	2次敗退
	石橋 麻衣	佛教大学	5000m	1組6着	16.26.03	—	—	—	—	9着	16.14.58	決勝第9位
			10000m	—	—	—	—	—	3着	33.41.90	銅メダル	
	田中 華絵	立命館大学	5000m	2組2着	16.28.05	—	—	—	—	6着	16.04.05	決勝第6位
			10000m	—	—	—	—	—	2着	33.15.57	銀メダル	
	伊藤 愛里	関西大学	100mH	3組5着	13.93(-0.1)	—	—	1組7着	13.56(-0.4)	—	準決勝敗退	
	高武 華子	福岡大学	走幅跳	A組 8位	6.13(+0.1)	—	—	—	—	—	予選敗退	
	岩川真知子	立命館大学	ハーフマラソン	—	—	—	—	—	4着	1.16.53	決勝第4位	
	小田切垂希	名城大学	ハーフマラソン	—	—	—	—	—	5着	1.17.02	決勝第5位	
	野村 沙世	名城大学	ハーフマラソン	—	—	—	—	—	3着	1.16.48	銅メダル	
	竹地 志帆	佛教大学	ハーフマラソン	—	—	—	—	—	7着	1.18.16	決勝第7位	
	団体	—	ハーフマラソン	—	—	—	—	—	1位	3.50.43	金メダル	
	岡田久美子	立教大学	20kmW	—	—	—	—	—	—	16着	1:54.07	決勝第16位

第27回ユニバーシアード競技大会(2013/カザン) 陸上競技日本選手団競技結果

	氏名	所属	種目	予選1次		予選2次		準決勝		決勝		備考
				着順	記録	着順	記録	着順	記録	着順	記録	
男子	山縣 亮太	慶應義塾大学	100m	7組1着	10.41 (±0)	3組1着	10.27 (-0.1)	1組2着	10.34 (-0.2)	2着	10.21 (+0.5)	決勝第2位 銀メダル
	与那国 壘	中京大学	100m	2組2着	10.70 (+0.8)	2組8着	10.80 (-0.3)					2R敗退
	飯塚 翔太	中央大学	200m	5組1着	21.09 (+0.5)	1組1着	20.74 (+0.1)	1組2着	20.43 (+2.2)	3着	20.33 (+2.4)	決勝第3位 銅メダル
	橋元 晃志	早稲田大学	200m	1組1着	21.51 (-0.2)	2組5着	21.61 (+1.7)					2R敗退
	木村 淳	中央大学	400m	3組2着	47.42	-	-	1組5着	46.84			準決勝敗退
	山崎 謙吾	日本大学	400m	4組3着	47.32	-	-	2組5着	46.90			準決勝敗退
	原 洋介	日本大学	4×100mR									リレー出場
	川元 奨	日本大学	800m	5組2着	1:51:15	-	-	3組4着	1:48:56			準決勝敗退
	村山 謙太	駒澤大学	10000m							10着	30.02.46	決勝第10位
	服部 翔大	日本体育大学	10000m							6着	29.28.53	決勝第6位
			ハーフマラソン							5着	1:05:00	決勝第5位
	中村 匠吾	駒澤大学	ハーフマラソン							3着	1:04:21	決勝第3位 銅メダル
	蛭名 聡勝	帝京大学	ハーフマラソン							8着	1:05:39	決勝第8位
	山岸 宏貴	上武大学	ハーフマラソン							4着	1:04:41	決勝第4位
	設楽 悠太	東洋大学	ハーフマラソン							20着	1:08:25	決勝第20位
	大室 秀樹	筑波大学	110mH					1組5着	13.97 (+2.2)			準決勝敗退
	記野 友晴	福岡大学	400mH	2組1着	50.32	-	-	1組2着	50.31	4着	50.02	決勝第4位
	野澤 啓佑	早稲田大学	400mH	4組1着	50.01	-	-	2組4着	49.90	6着	50.15	決勝第6位
	高橋 英輝	岩手大学	20kmW							9着	1:25:19	決勝第9位
	戸辺 直人	筑波大学	走高跳	B組1位	2m20	-	-	-	-	9位	2m20	決勝第9位
	山本 聖途	中京大学	棒高跳	-	-	-	-	-	-	2位	5m60	決勝第2位 銀メダル
	堤 雄司	国土館大学	円盤投	B組4位	57m54	-	-	-	-	8位	58m43	決勝第8位
	ディーン元気	早稲田大学	やり投	A組4位	72m11	-	-	-	-	5位	78m21	決勝第5位
新井 涼平	国土館大学	やり投	B組3位	72m71	-	-	-	-	8位	75m53	決勝第8位	
	(山縣, 原, 木村, 飯塚)	4×100mR	3組3着	39.85			(山縣, 原, 与那国, 飯塚)		2着	39.12	決勝第2位 銀メダル	
	(原, 野澤, 記野, 山崎)	4×400mR	1組3着	3.10.39			(木村, 野澤, 川元, 山崎)		5着	3.06.58	決勝第5位	
	ハーフマラソン団体								2位	3:14:02	決勝第2位 銀メダル	
女子	鈴木亜由子	名古屋大学	5000m							2着	15.51.47	決勝第2位 銀メダル
			10000m							1着	32.54.17	決勝第1位 金メダル
	荘司 麻衣	中京大学	5000m							3着	16.11.90	決勝第3位 銅メダル
			10000m							4着	33.22.83	決勝第4位
	津田 真衣	立命館大学	10000m							3着	33.14.59	決勝第3位 銅メダル
			ハーフマラソン							1着	1:13:12	決勝第1位 金メダル
	上野 泰加	筑波大学	ハーフマラソン							9着	1:14:50	決勝第9位
	三井 綾子	立命館大学	ハーフマラソン							7着	1:14:10	決勝第7位
	奥野有紀子	京都産業大学	ハーフマラソン							3着	1:13:24	決勝第3位 銅メダル
	鈴木ひとみ	玉川大学	ハーフマラソン							6着	1:14:05	決勝第6位
前田 浩唯	立命館大学	20kmW							13着	1:38:48	決勝第13位	
高橋 亜弓	筑波大学	円盤投							10位	47m52	決勝第10位	
	ハーフマラソン団体								1位	3:40:41	決勝第1位 金メダル	

第28回ユニバーシアード競技大会(2015/光州) 陸上競技日本代表選手団競技結果

	氏名	所属	種目	1次予選		2次予選		準決勝		決勝		備考
				着順	記録	着順	記録	着順	記録	着順	記録	
男子	小池 祐貴	慶應義塾大学	100m	2組2着	10.43(+1.7)	1組3着	10.49(-0.8)	1組5着	10.35(+1.8)	/		準決勝敗退
	諏訪 達郎	中央大学	100m	1組3着	10.51(+0.8)	2組DQ		/		/		2次予選敗退(失格)
	長田 拓也	法政大学	200m	7組2着	21.25(-0.6)	4組1着	21.04(+0.4)	2組4着	20.90(-0.4)	6着	20.90(-2.5)	決勝第6位 入賞
	谷口耕太郎	中央大学	200m	1組1着	20.90(+1.6)	2組2着	21.09(-1.5)	1組3着	21.15(-0.2)	7着	21.17(-2.5)	決勝第7位 入賞
	佐藤拳太郎	城西大学	400m	5組2着	47.49			2組3着	46.36	/		準決勝敗退
	北川 貴理	順天堂大学	400m	4組1着	47.34			1組3着	46.25	7着	46.03	決勝第7位 入賞
	中谷 圭佑	駒澤大学	5000m	2組1着	14.16.60					10着	14.33.85	決勝第10位
			10000m							3着	29.19.30	決勝第3位 銅メダル
	潰滝 大記	中央学院大学	5000m	1組2着	14.01.40					6着	14.13.54	決勝第6位 入賞
			10000m							9着	29.52.91	決勝第9位
	川端 千都	東海大学	10000m							12着	30.06.42	決勝第12位
	一色 恭志	青山学院大学	ハーフマソン							2着	1.04.52	決勝第2位 銀メダル
	工藤 有生	駒澤大学	ハーフマソン							5着	1.06.10	決勝第5位 入賞
	高橋 裕太	帝京大学	ハーフマソン							3着	1.05.29	決勝第3位 銅メダル
	小椋 裕介	青山学院大学	ハーフマソン							1着	1.04.41	決勝第1位 金メダル
	増野 元太	国際武道大学	110mH	2組2着	13.76(+0.3)					3着	13.69(+0.7)	決勝第3位 銅メダル
	松永 大介	東洋大学	20kmW							3着	1.22.06	決勝第3位 銅メダル
	野田 明宏	明治大学	20kmW							8着	1.25.36	決勝第8位 入賞
	平松 祐司	筑波大学	走高跳	A組8位	2m10					/		予選敗退
	高政 祐也	順天堂大学	走幅跳	B組8位	7m39(-0.2)					/		予選敗退
毛呂 泰紘	順天堂大学	走幅跳	A組5位	7m56(-0.2)					7位	7m77(+0.7)	決勝第7位 入賞	
森 營	中央大学	やり投	A組8位	71m19					/		予選敗退	
	(大瀬戸-長田-小池-諏訪)	4×100mR	1組1着	38.93	(大瀬戸-長田-諏訪-谷口)			1着	39.08	/		決勝第1位 金メダル
	(ウォルシュ-佐藤-北川-加藤)	4×400mR	1組2着	3.04.83	(ウォルシュ-加藤-北川-佐藤)			2着	3.07.75	/		決勝第2位 銀メダル
		ハーフマソン団体						1位	3.15.03	/		決勝第1位 金メダル

女子	土井 杏南	大東文化大学	100m	3組2着	11.84(+0.5)			3組4着	11.61(+1.8)	7着	11.70(+0.4)	決勝第7位 入賞
			200m	3組4着	24.57(-0.8)			1組7着	24.64(-1.3)	/		準決勝敗退
	大森 菜月	立命館大学	5000m	1組4着	16.18.99					7着	16.07.53	決勝第7位 入賞
	小枝 理奈	大東文化大学	5000m	2組2着	16.34.25					8着	16.09.92	決勝第8位 入賞
			10000m							5着	33.47.21	決勝第5位 入賞
	新井沙紀枝	大阪学院大学	10000m							9着	34.24.92	決勝第9位
			ハーフマソン							DNF		決勝途中棄権
	上原明悠美	松山大学	ハーフマソン							3着	1.15.35	決勝第3位 銅メダル
	菅野 七虹	立命館大学	ハーフマソン							2着	1.15.24	決勝第2位 銀メダル
	出水田真紀	立教大学	ハーフマソン							4着	1.16.09	決勝第4位 入賞
	福内 櫻子	大東文化大学	ハーフマソン							7着	1.17.44	決勝第7位 入賞
	山内 愛	大阪成蹊大学	やり投	A組10位	50m59					/		予選敗退
		ハーフマソン団体						1位	3.47.09	/		決勝第1位 金メダル

第29回ユニバーシアード競技大会(2017/台北)
日本代表【陸上競技】 競技結果

	氏名	所属	種目	1次予選				2次予選				準決勝				決勝			備考	
				日付	組	着順	記録	日付	組	着順	記録	日付	組	着順	記録	日付	着順	記録		
男子	多田 修平	関西学院大学	100m	8/23	4組	1着	10.33(-1.3)	8/23	3組	1着	10.29(0.0)	8/24	1組	3着	10.27(0.0)	8/24	7着	10.33(-0.9)	7位入賞	
	田中 佑典	日本ウェルネススポーツ大学	100m	8/23	1組	2着	10.51(+0.1)	8/23	2組	4着	10.60(-0.4)								2次予選敗退	
	山下 潤	筑波大学	200m	8/25	7組	1着	21.02(+2.3)					8/26	3組	2着	21.20(-3.2)	8/26	8着	21.16(-3.8)	8位入賞	
	北川 翔	順天堂大学	200m	8/25	5組	1着	21.45(-2.4)					8/26	2組	5着	21.05(+1.0)				準決勝敗退	
	北川 貴理	順天堂大学	400m	8/23	3組	3着	47.85												予選敗退	
	野本 周成	早稲田大学	110mH	8/26	2組	2着	14.03(-2.4)					8/27	2組	2着	13.79(-2.0)	8/27	5着	13.71(-0.5)	5位入賞	
	金井 大旺	法政大学	110mH	8/26	3組	1着	14.07(-4.0)					8/27	1組	3着	13.66(+0.9)	8/27	4着	13.69(-0.5)	4位入賞	
	鍛冶木 峻	城西大学	400mH	8/24	4組	2着	51.73					8/25	3組	5着	50.99				準決勝敗退	
	塩尻 和也	順天堂大学	5000m																	欠場
			10000m												8/24	3着	29:20:96			銅メダル
	鈴木 壘人	青山学院大学	10000m																	欠場
			ハーフマラソン												8/27	12着	1:10:23			
	柄木 渡	順天堂大学	ハーフマラソン														8/27	6着	1:08:59	6位入賞
	鈴木 健吾	神奈川大学	ハーフマラソン														8/27	3着	1:06:56	銅メダル
	工藤 有生	駒澤大学	ハーフマラソン														8/27	2着	1:06:23	銀メダル
	片西 景	駒澤大学	ハーフマラソン														8/27	1着	1:06:09	金メダル
	野田 明宏	明治大学	20mW														8/26	7着	1:31:00	7位入賞
	及川 文隆	東洋大学	20mW														8/26	3着	1:30:11	銅メダル
	山西 利和	京都大学	20mW														8/26	1着	1:27:30	金メダル
	江島 雅紀	日本大学	棒高跳	8/25	B組	2位	5.30										8/27	4位	5.40	4位入賞
橋岡 優輝	日本大学	走幅跳																	欠場	
山川 夏輝	日本大学	走幅跳	8/27	B組	8位	7.53(+1.0)													予選敗退	
山本 凌雅	順天堂大学	三段跳	8/23	B組	1位	16.65(+0.9)										8/25	3位	16.80(+1.7)	銅メダル	
墨 訓熙	中京大学	ハンマー投	8/23	A組	8位	62.01										8/24	13位	64.00		
小南 拓人	国士館大学	やり投	8/24	B組	9位	70.43													予選敗退	
小椋 健司	日本大学	やり投	8/24	A組	4位	76.13										8/26	9位	74.82		
	走順【田中-多田-北川-山下】	4×100mR	8/27	4組	2着	39.26										8/28	1着	38.65	金メダル	
	上位3名【片西、工藤、鈴木(健)】	ハーフマラソン団体														8/27	1位	3:19:28	金メダル	
	上位3名【山西、及川、野田】	20kmW団体														8/26	1位	4:28:41	金メダル	
女子	氏名	所属	種目	1次予選				2次予選				準決勝				決勝			備考	
	日付	組	着順	記録	日付	組	着順	記録	日付	組	着順	記録	日付	着順	記録					
	前山 美優	新潟医療福祉大学	100m	8/23	1組	4着	12.01(-0.8)	8/23	2組	6着	11.93(-0.3)								2次予選敗退	
	壹岐 いちこ	立命館大学	100m	8/23	3組	3着	12.02(-0.4)	8/23	4組	6着	11.96(-0.3)								2次予選敗退	
	中村 水月	大阪成蹊大学	200m	8/25	2組	4着	25.17(-1.9)												1次予選敗退	
	竹内 爽香	慶応義塾大学	200m	8/25	4組	7着	24.68(+0.4)												1次予選敗退	
	関谷 夏希	大東文化大学	5000m												8/27	14着	16:26:36			
			10000m												8/23	12着	35:21:19			
	細田 あい	日本体育大学	5000m												8/27	10着	16:05:66			
			10000m												8/23	3着	33:27:89			銅メダル
	棟久 由貴	東京農業大学	10000m												8/23	4着	33:40:45			4位入賞
			ハーフマラソン												8/27	1着	1:13:48			金メダル
	福居 紗希	城西大学	ハーフマラソン												8/27	3着	1:14:37			銅メダル
	古谷 奏	松山大学	ハーフマラソン												8/27	4着	1:15:10			4位入賞
	山口 可純	大東文化大学	ハーフマラソン												8/27	11着	1:21:55			
	出水田 真紀	立教大学	ハーフマラソン												8/27	5着	1:16:24			5位入賞
	斉藤 真理菜	国士館大学	やり投	8/23	A組	3位	57.24								8/25	2位	62.37			銀メダル、日本学生新記録
北口 襟花	日本大学	やり投	8/23	B組	1位	57.96								8/25	10位	56.30				
ヘンピル 恵	中央大学	七種競技																	欠場	
	走順【竹内-中村-壹岐-前山】	4×100mR	8/27	3組	1着	44.71								8/28	3着	44.56			銅メダル、日本学生新記録	
	上位3名【棟久、福居、古谷】	ハーフマラソン団体												8/27	1位	3:43:35			金メダル	

金メダル：7
銀メダル：2
銅メダル：7
入賞（第4位-第7位）：10
日本学生新記録：2

資料6 代表選手に対するアンケートの結果（まとめ）

ユニバーシアード代表選手の皆様へ（アンケートのお願い）

このアンケートは、「第29回ユニバーシアード競技大会：陸上競技（2017／台北）」の代表選手を対象とし、各代表選手の競技大会に対する考え方、事前準備、大会中の練習や競技などについて体験談を中心にご回答いただくことを目的としております。ご回答は第63回指導者会議（日本学連主催、2018年3月3日開催）の参考資料として活用させていただきます。尚、ご回答は匿名とし、上述の目的以外に利用することはありませんので、是非ともアンケートにご協力をお願いいたします。よろしく願いいたします。

注）ご回答は、2017年9月30日（土）までにメール（学連：juau.j@joy.ocn.ne.jp）でご返送くださるようお願いいたします。

公益社団法人日本学生陸上競技連合 指導者会議運営委員会 2017年8月29日（火）

<補足> アンケートの回収結果：回答数は19名（代表選手38名）であった（2017年10月1日時点）。その後、無回答の選手に督促メールを送った結果、回答数は合計34名となった（2018年3月9日時点）。尚、選手38名中2名については怪我等のために回答から除いた。

その内容は以下の通りである。

次の項目について簡潔（or 箇条書き）に記載してください。

1—1. ユニバーシアード競技大会はあなたにとってどのような舞台でしたか

- #1 世界選手権、オリンピックのために世界を経験する貴重な試合。今シーズンで最重要視していた試合。
- 2 大事な舞台
- 3 はじめての国際大会。自分の力を試す・日本のトップの選手から学ぶチャンス。
- 4 経験を積むことができ、責任感を持った試合
- 5 ハーフマラソン
- 6 無記入
- 7 大学4年間の総まとめ
- 8 初参加の国際大会で沢山の経験が出来た貴重な時間
- 9 今までに経験したことのない特別な大会で、競技者としても成長できた大会でした。
- 10 大学というカテゴリーの中で出場したかった大会でした。
- 11 経験を積めた大会
- 12 大学の世界大会なのでオリンピックなどにつながるような経験のできる大会。
- 13 目標にしていた舞台
- 14 お祭り
- 15 世界のレベルを知れた舞台、戦えない舞台ではないことが分かりました。
- 16 憧れの大会
- 17 世界で自分がどれくらいにいるのか確認できた大会。
- 18 初めての国際試合で、初めての雰囲気に触れることができた。もっと強くなりたいと思いました。いつも以上に、結果を残さなければならぬと自分ではわかっていたものの、うまくできなくてとても申し訳なかったです。
- 19 目標としていた舞台
- 20 シーズン最大のポイント
- 21 憧れであった夢の舞台
- 22 通過点のつもりでした

- 23 世界大会の雰囲気や、難しさを学んだ
- 24 世界の人達と交流を深めることができ、将来、世界を視野に入れて競技を続けたいと感じた大会でした
- 25 暑かった
- 26 大学生のオリンピックと言われるユニバーシアード大会で、同世代の各国トップ選手と競技ができる素晴らしい舞台でした
- 27 日本代表経験ができ競技力向上に対する自覚が芽生えた
- 28 国際大会
- 29 不安が残るまま出場してしまった。悔しい経験をした。
- 30 可能性
- 31 自分のレベルを知る事ができたとても意味のある舞台
- 32 最高の舞台
- 33 オリンピックに繋がる大会
- 34 初の国際試合でした。

1-2. ユニバーシアード競技大会でのあなたの競技目標 ⇒ 本資料では割愛した

2-1. 事前準備 (国内)

- #1 7月に掴んだモノをしっかり練習の中でも体現し、それをいつでもできるように繰り返しトレーニングをして、ユニバーシアードにピーキングしていきました。
- 2 夏季休暇だったためしっかり準備できたと思います。
- 3 夏合宿での走り込み・スピード練習
- 4 ケガをせず、体調を崩さないようにした
- 5 夏合宿
- 6 走り込み、暑さ対策
- 7 陸連合宿・個人合宿等で調整練習・暑熱対策
- 8 苦手だったアンダーハンドパスの練習
- 9 距離走などハーフマラソンに向けて走り込みをしていきました。
- 10 陸連合宿に参加させていただき、直前は大学の合宿を通して調整を行った。
- 11 しっかり準備することは出来なかった。
- 12 日本選手権の後教育実習でそのあとから高地に上がって合宿をした。
- 13 いつも通りできるように調整した。
- 14 補食の用意
- 15 スタートや、スタートからの加速を意識して練習していました。
- 16 練習や前回大会結果
- 17 試合に向けた調整
- 18 普段はほとんど怪我をしますが、直前1ヶ月走れなくなってしまう、不安が残りました。怪我明け以降、どういう練習で戻していけばいいのか、というところで間違ってしまったのだと思います。
- 19 合宿など
- 20 1ヶ月前からユニバーシアードに向けた調整を行った。
- 21 寮内合宿
- 22 順調に状態を作る事ができた。
- 23 支給品のサイズ表記と実際のサイズがバラバラだった。(ポロシャツとTシャツ)
- 24 距離に対応するため、距離走を行いました。また、暑さに対応するため給水取りの練習を行いました。お盆は

強化合宿を行いました。さらに、現地の食事が合わなかった時のため、レトルトパックのお米や味噌汁などの日本食を持参しました。

- 25 調子をあげる
- 26 レベルの高いなかでも冷静に戦えるよう、自分より速い選手と練習をし、自分のパフォーマンスに集中する工夫を行いました。
- 27 合宿での走り込み
- 28 特になし
- 29 (無記入)
- 30 順調
- 31 体調管理をしっかり行った
- 32 体調管理
- 33 自身の跳躍の動作確認
- 34 レース展開を予想し、どこで動きの切り替えをするか考えていました。

3. 大会中の練習や競技など (台北)

- #1 台湾についてからはほとんど練習はせず、動きや感覚の最終確認として数本おこない、他は休養にあてました。
- 2 順調に調整できていた、競技は団体優勝のために歩ききることに集中した。
- 3 調整練習
- 4 調子が落ちていると感じたので、ケアをしながら出力を高められるように意識していた。
- 5 感染性腸炎になりました。
- 6 問題なかった。
- 7 選手村内のトラック・周辺の公園での練習
- 8 100mの中盤の動き。バトンパスのタイミングと精度を上げる。
- 9 大会中は自分の種目だけでなく、他の種目の応援をすることで刺激をもらいました。
- 10 調子が上手く上がらない中、焦らず少しずつやれることをやっていけた。
- 11 しっかり練習できた、ら
- 12 競技はみていなくて、周辺道路か選手村のサブトラックで練習を行った。
- 13 とても暑い気候だったので水分をこまめに取るようにした。
- 14 問題なく行えた。
- 15 試合を意識して練習しました。競技ではいつもと違う雰囲気少し流された感じがします。
- 16 緊張があったが、いつも通りに行えた。
- 17 海外にいち早く慣れるようにコミュニケーションを多く取るようにした。
- 18 国内での試合と違うことが色々あって、パニックもありましたが、たくさんサポートしていただいて自分の競技、練習に集中することができました。
- 19 海外のやり方にしっかり対応できなかった。
- 20 環境が日本と近かったのでやりやすかった
- 21 基本はジョグと快調走
- 22 時差もほとんどなく、ベストな状態に合わせる事ができた。
- 23 試合が初日だったのもあり、投擲練習場の時間の確認ができず、試合 2 日前の投擲練習時間が 20 分だった。また、ハンマーの種類の違いや、サークルの違いに焦ってしまった。
- 24 暑さ対策のために帽子を被り、服装をできるだけ涼しくして練習を行いました。突然のスコールに対応するため、傘や着替えの服を持ち歩くようにしました。また、脱水症を防ぐため、水分補給をこまめに行いました。睡眠をしつ

かりとるために、耳栓やアイマスクを活用しました。レースでは、海外選手のスパート力に対応するため、積極的に最初から日本人で引っ張りました。ハーフマラソンでは、日本チームで給水やスポンジをお互い協力して回しました。

- 25 風邪をひかないようにする
- 26 練習は複数の競技場が用意されていたので、臨機応変に利用させていただきました。競技にも集中できる環境を整えていただきました。
- 27 調整練習
- 28 調整練習
- 29 身体を動かす場所は選手村にあり、いつでも思った時間に動けてよかった。スコールによる競技時間の変更は初めての経験だった。
- 30 良かった
- 31 時差はあまりなかったので気候に適応することを入念に行った
- 32 自分なりに練習、競技ができた
- 33 レベルが高いと感じた
- 34 特にありません。動きの確認程度。

4-1. 出場した競技種目 ⇒ 本資料では割愛した

4-2. 結果(予選・準決勝・決勝、順位、記録) ⇒ 本資料では割愛した

4-3. パーソナルベスト記録(PB)・シーズンベスト記録(SB) ⇒ 本資料では割愛した

5. 今後の課題など

- #1 主にタフさと身体を作ること
- 2 世界で活躍できるように努力する
- 3 自分でレースを引っ張っていける力と自信をつける。故障せず継続して練習するための体づくり。
- 4 ラウンドを重ねることができないので、スピードアップをしながらもタフさを手に入れたい。
- 5 体調を万全にしてレースに準備すること。
- 6 準備力
- 7 シニアのカテゴリでの国際大会で通用する力をつける。
- 8 日本選手権上位はもちろん世界の大舞台で活躍できるような選手になる。
- 9 ユニバーシアードの経験を活かし、チームでも個人でも日本の学生のトップレベルで走り続ける選手になります。
- 10 歩型違反を取られてしまい、実力を出し切ることができなかったため、歩型違反を取られないフォームを獲得すること。
- 11 筋力強化
- 12 まだ後半とペースアップに繋がれないのでできるようにする。
- 13 世界大会入賞
- 14 夏期に調子を落としてしまう傾向を軽減させる。
- 15 国際試合でも最低限自分の力を発揮すること。
- 16 力を確実に出せる力をつける。
- 17 自己ベストと同じようなパフォーマンスを毎試合すること。
- 18 ユニバーシアードでほぼシーズンを終えてしまったので、来年こそ帰り咲けるように頑張ります。

怪我をしないことは当たり前ですが、一番大切なこと。

自分の課題を一つ一つ冬の期間に無くしていきたいと思います。

- 19 長い距離の練習、練習量
- 20 決勝にピークを持っていくこと
- 21 陸上競技に集中すること。まだまだ心身ともに力不足だということを強く感じたので、この経験を大切にして感謝をしてまたひたむきに努力をして強くなっていきたい。
- 22 ステップの強化。ただし、ホップとジャンプの距離が落ちないようなタメをステップでつくる。まずは日本記録を出すことです。
- 23 ハプニングがあっても対応できるような心構えをしていきたい。
- 24 海外選手のスパートに対応するためにラストの粘り強さをつけるため、ロングスパート力を磨いて行きたいです。
- 25 生きる！
- 26 国内大会と国際大会でタイム差が大きくなってしまっているので、国際大会でもベストに近いパフォーマンスを出来るようになってはいけません。環境などの普段と違うことに惑わされず、自分のパフォーマンスに集中できる力をつけたいです。ユニバーシアード大会で経験させていただいたことを無駄にしないよう、課題解決のために努力していきます。
- 27 ユニバーシアードの経験を活かしてシニアのレベルで日本代表になれるようにしたい。
- 28 勝負強さ
- 29 シーズン前半に、技術面で定まらず苦労しました。今後は技術をもっと突き詰めることと体力面のレベルアップを図って行きたいです。大きな試合があるシーズン前半に結果を残せるサイクルを作り出さなくては行けないと思いました。
- 30 海外での試合で、体調を整えること。助走スピードの向上
- 31 80m 投げることをゴールではなく通過点として取り組んでいきたい
- 32 世界に通用する投げをする
- 33 どんな天候になっても対応する
- 34 リード脚の振り下ろし、スプリント能力の向上。

6. 次回のユニバーシアード大会に向けてのご意見やご要望がありましたら、自由にお書きください。

注) 記入者のみ記載しました。

- #1 口に合う食事が少なかったのでそこらへんは工夫が必要だと感じました。
 - 5 食事の取り方を気をつけます。
- 15 今回初めて女子リレーを派遣して下さることになってありがとうございます。女子の陸上競技は男子に比べてまだまだ世界に及ばないレベルですが、このような国際試合を経験させてもらうことによって世界に少しずつ近づいていくんじゃないかと思いました。サポートが手厚くすごい自分の競技に集中することが出来ました。
 - 19 バスや食堂などが異常に寒いことを言いすぎなぐらい伝えた方がいい。
以上でアンケートは終了です。ご協力ありがとうございました。
 - 23 施設利用時間や、移動時間などの情報を選手に伝わるようにしてほしい。
 - 27 支給されて実際に使わないウェアが多いので勿体無いと感じました。
 - 33 明確な目標設定をする。

以 上

資料7 代表役員に対するアンケート結果

＜はじめに＞ アンケートの対象と質問内容・調査方法、結果の利用目的など、調査期間、調査主体

日本代表役員に対するアンケートは、①チームリーダー/監督/総務（台北大会の競技環境などについて）、②コーチ（代表選手に対する支援・助言等について）、③医師及びトレーナー（台北大会の実情と今後の課題などについて）の区分で強化委員長を通して依頼し回収した。

ご回答は、ユニバーシアード強化研究会（第63回指導者会議：日本学連主催、2018年3月3日開催）の参考資料として活用させていただきます。尚、ご回答は匿名とし、上述の目的以外に利用することはありませんので、是非ともアンケートにご協力をお願いいたします。よろしくお願いいたします。

アンケート調査期間（2017年10月25日～2017年11月10日）

公益社団法人日本学生陸上競技連合 指導者会議運営委員会

付加事項：アンケートを依頼するにあたって

- ・お詫び：質問の内容が細かくて大変申し訳ありません。
- ・ご回答は、ユニバ強化研究会で取り上げる内容（小テーマ）を検討する際の資料とさせていただきます。
- ・ご回答は可能な範囲でお答えください。お願い致します。

＜1＞ チームリーダー/監督/総務

＜質問＞ 次の項目（台北大会2017の競技環境など）について簡潔にご回答ください。

（例えば、良、普通、悪： +コメント） ←（分かる範囲で結構です）

1. 選手村（宿舎：寝室、食事、会議室、フィジカルセラピー室、外国選手との交流など）
⇒普通：宿舎とレストランが遠く毎日、道を横断しての移動は不便であった。
2. 練習場（サブトラック、ウェイトトレーニング場など）
⇒普通：サブトラックは400mトラックが望ましい。サブトラック以外の練習会場が遠く不便さを感じた。
また、サブトラックの開放日を早くすべきであろう。
3. 本競技場（トラック&フィールド）、コース（ハーフマラソン、20km競歩）
⇒普通：本競技場とマラソンコースの交通アクセスが不十分であった。
4. 移動手段（選手村と競技場など）
⇒悪い：選手村と本競技場が遠く往復2時間は予測しないと行けない状況であった。
5. 医事関係（怪我・病気の治療、暑さ対策など）
⇒良い：事前調査もあり対応が良かった。
6. 競技運営（監督会議、競技プログラム、コーチ席、審判判定状況、TIC対応など）
⇒普通：コーチ席は、コーチの多と場で考え、場所を確保してほしい。
7. その他
⇒特に無し
8. 次回ユニバーシアード大会2019に向けてのご意見などがありましたら、自由にお書きください。
⇒本競技場と選手村が遠い場合、本競技場周辺のホテルを大会期間借り、選手およびコーチの待機場所として活用すべきであろう。

＜2＞ コーチ

＜質問＞ あなた（コーチ）が担当された代表選手について、次の質問に簡潔にお答えください。

- 1) 今大会では、代表選手を何人担当されましたか。（担当人数 ⇒（男女計 人）
 - a) 総務のため、全員になります。ただし、短距離、ハードルを主体として担当男女12名（男子8、女子4）
 - b) 男女計 6人
 - c) 男子計 3人
 - d) 男女計 13人（ブロックスタッフ3名で、男女13人を担当しました）

- e) 男子3名、女子0名（当初男子4名、内1名は怪我のため辞退）
- f) 男女計 12人
- g) 男女計 11人

2) 渡航前に、担当された代表選手の「競技目標」について、どの程度把握していましたか。

- a) 具体的な順位、メダルを目標としていた。
- b) 目標タイムに関しては、気温等フィールドコンディションの関係上、具体的な数字は把握していませんが、順位、レース戦略は事前にミーティングを実施し共通認識を持っていました。
- c) 個人目標、順位、そして、ブロックの目標を共有しておりました。
- d) ブロックで事前合宿を実施したので、その時にチームとして、個人としての目標設定は、徹底されていたと思います。
- e) 事前にパーソナルコーチに連絡をして、競技目標を確認しました。また、競技期間中もパーソナルコーチに再確認しました。確認事項は、主に目標順位や記録、技術ポイント、心理的アプローチ方法を確認しました。
- f) 80%
- g) 個人種目においては各大学での指導等があると判断し、特別把握はしていなかった。合流後、状態等を確認し各選手より目標について確認を行いサポートに回った。リレー種目においては渡航前より男子金メダル、女子メダル獲得を目標とすることを確認した。

3) 上記2)の競技目標達成に関わる助言などを（代表選手に）どの程度できましたか。

- a) 試合中、過度なプレッシャーにはならないように具体的なことを中心に行った。
- b) 長距離陣（男女）においては、大会1ヶ月前に研修合宿を実施し、その後継続的にコンディション報告を受け対応してきました。スタート地点に立つまでの出来る限りの準備は行なってきました。
- c) 代表選出から今大会までは、選手はもちろん、所属先、専任コーチと連携が図れていました。
- d) これまでユニバのスタッフとして関わってきた経験から、選手が不安なくスタートラインに立てるよう、ユニバ独特の雰囲気や他国選手の情報など、細かくアドバイスができたのではないかと思います。
- e) 基本的には、パーソナルコーチの方針に従うように指示をしました。試合に至るまでの過程では、その結果を聞き、助言を行いました。特に跳躍競技は技術性が高いので、パーソナルコーチと選手の感覚を重視しました。また、試合当日もパーソナルコーチが来ていただいたので、十分に助言することができました。
- f) 100%
- g) 個人種目に関しては選手からの要望に常に応える形で取り組んだ。リレー種目に関しては個人種目での取り組みを踏まえ改善すべき点について助言を行った。

4) 代表選手の競技結果から、彼／or彼女はベストを尽くしたと思いますか。

- a) 選手はほぼベストを尽くし、その時の調子の中でもっともよいパフォーマンスを発揮したと考えます。
- b) ベストを尽くせたと思います。
- c) 思います。
- d) 所属先の指導者から得ていた選手の調子などを考えると、それぞれの選手が十分力を発揮したのではないかと思います。
- e) 試合の過程や結果を見るとベストは尽くしたと思われませんが、もうひと頑張りできたというのが、正直な感想です。選手も試合後、全く同じ感想を持ちました。
- f) 半分はできた。
- g) 個人種目に関しては「いつもどおり」の取り組みに徹した様子でベストは尽くしきれなかったように思う。国際大会であること、いつもと環境が違うことを加味した取り組みが出来ていなかったように感じる。その個人種目での結果を踏まえ、リレー種目において現状を把握し結果へとつなげる取り組みが出来たことで選手たちはベストを尽くすことが出来たように感じる。

5) あなたは、代表選手の今後の課題について、代表選手と共有することができましたか。

- a) 今後の課題については試合でのベストパフォーマンスのことだけに特化して考えたのでその話や展望については触れていない。
- b) レース終了時点で簡単な内省報告を受けています。従って今後の課題、目標等に関して情報共有するコミュ

ニケーションは出来ています。

- c) 技術面、練習への取り組みなど今後の課題について、共有できたと思います。
- d) レース後に簡単なアドバイスはしましたが、細かいところまではしていません。
- e) 試合後に、世界の舞台で戦うために必要なことを共有することが出来たと思います。世界選手権では、表彰台の選手と圧倒的な差を感じますが、ユニバーシアードは、跳躍種目でも世界の表彰台を目指せる種目になってきました。この経験が次のステップに繋がり、大学間を越えて、日本代表としての自覚を持つことが出来る大会であったと実感しています。
- f) あまりできなかった。
- g) 競技終了後にはそれぞれの選手たちとしっかり話は出来た。今後の課題についてはそれぞれの大学に持ち帰り、今回の反省点を改善することの話も出来た。

6) あなたは、現状の代表選手のための支援システム（例えば、コーチング・フィジカルセラピー・医療行為・応援などのシステム）についてどう思いますか。

- a) ① () 現状のままでよいと思う ② () わからない ③ (○) 改善して欲しい
(コメント：卒業後の進路やトレーニングのことを相談、解決していける機関もしくはそれを扱う学連内での部署などが必要であると考えます)
- b) ① (○) 現状のままでよいと思う ② () わからない ③ () 改善して欲しい
- c) ① (○) 現状のままでよいと思う ② () わからない ③ () 改善して欲しい
(コメント：担当コーチの裁量で対応)
- d) ① (○) 現状のままでよいと思う ② () わからない ③ () 改善して欲しい
- e) ① (○) 現状のままでよいと思う ② () わからない ③ () 改善して欲しい
(コメント：欲を言えば、村外に庶務的な活動ができる人材がいるとより支援体制が強化されると感じました。)
- f) ① () 現状のままでよいと思う ② () わからない ③ (○) 改善して欲しい
(コメント：コーチングスタッフを増やしてもらいたい)
- g) ① () 現状のままでよいと思う ② () わからない ③ (○) 改善して欲しい
(コメント：コーチングスタッフの増員を希望します。1人で担当する選手の数が多く負担が大きい)

7) 次回ユニバーシアード大会 2019 に向けてのご意見などがありましたら、自由にお書きください。

- a) 派遣選手の成績は今大会ではメダル獲得において日本がトップであったことから強化、選考と中期的ビジョンをもった結果であると考えます。しかし、参加標準記録を突破しながらも選考に漏れた選手もいるのは事実であり、そのことの丁寧な説明(例えばメディアへの説明)を行う必要はあると考えます。その選考の理由は結果からも妥当な選考であったということを示しています。さらなる飛躍を目指すのであれば選考の前段階である選手の強化策を学連が打ち出していくことが今後必要です。単純な合宿ですら連合主催で開催されておらず、一般種目は検討していく必要があると考えます。長距離種目中心の駅伝大会の数ばかりが主要大会の一覧に載るようになり、一般種目は年間2試合のみであることなどの吟味も今後の強化において必要かと考えます。
- b) 無回答
- c) 無回答
- d) 今回のユニバはスタッフ間の連携も取れており、代表選手も高い意識をもって大会にのぞんでいました。その結果、過去最高の成績を残すことができたのではないかと思います。次回ユニバにおいても、好成績を期待したいと思います。
- e) 今回参加した多くの選手は、選手村での拘束や決められたルール内での練習、他競技団体との行動など、NFによる日本代表派遣試合とは異なることも多く、試合の経験と共に大きな経験が出来ていたと思います。ぜひ、このユニバーシアードを世界への登竜門として、日本の競技力向上に大きな役割を果たしていただきたいと実感しました。
- f) スタッフの数をもう少し増やしてもらいたい。選考の透明性を明確にしてもらいたい。
- g) コーチングスタッフの増員

< 3 > 医師及びトレーナー

1. 台北大会 2017 の実情と今後の課題について簡潔に (or 箇条書き) ご回答ください。

1) 実情 (渡航前の準備・計画、現地での活動など)

- ・渡航前の準備としては、現地に持ち込む医薬品および医療機器の申請を行わなくてはならないが、JOC から書式が送られてきてから提出までの期間が短く、たいへんである。薬品名と数量のみならず、主成分名や剤型、標準包装形式などに至るまで、英語で記載しなければならない。
- ・派遣前のメディカルチェックが JISS で行われるが、その後のトレーニングにおいて選手の状態が変わることが多い。それを報告してもらえるように、メディカルチェック後に独自のアンケートを配布しているが、きちんと報告してくれない場合も多い。
- ・今回、長距離陣に関しては直前合宿に参加でき、多少状態を把握できたし、こちらからも情報提供できたのでよかった。
- ・今回は練習会場が種目によって異なっており、離れていたため、現地で各選手の状態を把握しづらかった。
- #1 選手との事前コンタクトが取りにくく、現状把握ができない
- #2 現地での活動は気候天候、場所や移動をふくめて、行ってみないとわからないところがあるので、さまざまなことを想定して物品の手配などをする必要がある。
- #3 各地区、各大学でメディカルサポートの体制に違いがあり、遠征前後のサポートにむらがでてしまう。
- #4 渡航直前の大きな怪我が多かった。
- ・ # 1 選手決定後から渡航までの間に、2 名の選手 (橋岡選手、ヘンプヒル選手) が試合に出場できないほどの怪我を受傷してしまった。怪我そのものも問題ではあるが、ヘンプヒル選手に関しては、その情報が届いたのが渡航日当日であった。もし、渡航前にその情報があれば、何かしらの手段を講じることができたはずである。
- ・ # 2 今回帯同しているトレーナーは経験が豊富であり、さらに総務や他のコーチとも、国内の競技会や学会などで日常的に接しているため、組織としての連携は非常に良く取れていたと感じる。

2) 今後の課題

- ・メディカルチェック後に配布しているアンケートの回収を確実にし、状態に変化があった場合には連絡してもらうことを徹底してもらう必要がある。
- #1←候補段階で選手の情報把握を行える体制を整える必要がある
- #3←インカレにユニバ代表トレーナー (候補含む) がトレーナーステーションを設け、代表選手、候補選手を中心に相談を受け付ける。そうすることで各大学の学生トレーナーの成長も促されるとともに、遠征前の情報収集をしやすい体制を作れる。
- #3←各大学のサポートをしてくださっているトレーナーさんを把握し、学連から何らかの情報提供をするなど、代表チームのスタッフの存在を周知しておく。そうすることで直前のコンタクトが取りやすくなる。
- ・ # 1←代表選手に内定した段階で傷病に関する報告義務を選手とその指導者に課すべきではないか。
- ・ # 2←トレーナーを選出する際、ケアやコンディショニングに関する技量も重要だが、日常からコミュニケーションを取れているかどうかなども加味すべきである (現状はそれが出来ているので課題ではない)。

2. 次回ユニバーシアード大会 2019 に向けてのご意見などがありましたら、自由にお書きください。

- ・イタリアで開催される予定であり、時差調整もあって余裕を持った渡航スケジュールになると思うので、かえって選手の状態を把握しやすくなると思う。もし直前に合宿することがあれば、是非参加して、選手の状態把握に努めたいし、こちらから情報提供もしていきたい。
- ・今大会、ご一緒させて頂いたトレーナーは経験豊富な方々であったため、現地に行ってみないとわからない事項にも円滑に対応することができた。スタッフの派遣人数にも限りがあるため、トレーナーの業務の中でも環境を整え、選手の動態を整理するなどのマネジメント能力が他の大会より必要だと感じる。今回同様に普段から学生を指導しているトレーナーの帯同が最適だと感じるため、次大会も加味して頂きたい
- ・2018 年日本インカレからでも上記のトレーナーステーションの設置をご検討いただければ幸いです。

以 上

資料8 平成29年度ユニバーシアード強化研究会（第63回指導者会議）開催要項

ユニバーシアード競技大会台北2017の検証と今後の課題 —次回ユニバーシアード競技大会2019に向けて—

日本学生陸上競技連合では、日本陸上競技界の発展のため、毎年「指導者会議」の名の下、シンポジウムや講演等を通じて競技者の強化に関するさまざまな課題について考えてきました。

同会議60回の節目となった2014年度は「日本学生陸上フォーラム2015」と題してバージョンアップし、「2020年夏季五輪東京大会に向けて、今、何ができるのか」を考えていく場には一新しました。翌年度の「日本学生陸上フォーラム2016」では、日本実業団陸上競技連合と日本学連の相互協力をキーワードとして学生アスリートの就職支援や就職後の練習環境支援に関するテーマで討論されました。約1年後、毎日新聞（2017年2月12日）に実業団が就職先仲介事業を開始する旨の記事が掲載されておりました。そして昨年度の「日本学生陸上フォーラム2017」では、リオ代表（オリンピック／パラリンピアン）の現役学生アスリートとベテラン社会人アスリートをパネリストとして迎え、「大きな舞台に出場して見えてきたもの」「学生時代にやっておくべきことは何か」のテーマで討論されました。

過去3回のフォーラムを別の視点からみ見ますと、東京五輪2020に向かって日本陸連・実業団・日本学連の連携強化の在り方について様々な視座から討論され、今後における三者の共通の課題と共に日本学連の独自の課題が多々明らかにされました。とりわけフォーラム2017で提案された後者の課題としては、「情報の共有化」「選手の共同育成」「選手への情報提供」「海外大会への出場」等が挙げられました。

平成29年度ユニバーシアード強化研究会は、「第63回指導者会議」の別称であり、日本学連の独自性の1つであるユニバーシアード競技大会で学生アスリートが数多くのメダルを獲得するための研究組織です。本年度の研究目的は、中長期的な視点に立ったユニバーシアード競技大会に関する基本構想案（注：次世代の指導者育成等も含むビジョン／仕組み）の策定も視野に入れながら、ユニバーシアード競技大会台北2017の検証を行って、今後の課題を明らかにすることにあります。研究の基本的枠組みはスポーツ経営学的方法を参考にしました。各演者には検証の視点（注1）と資料（注2）等を基にして検証と今後の課題について発言してもらいます。また進行はフロアの人も含めて活発な意見交換の場になるように努めます。

注1）検証の視点：選手選考、成績、条件

注2）資料：選手選考、JOC報告書（日本学連会報）、競技成績、代表役員アンケート等

記

1. 主催 公益社団法人日本学生陸上競技連合
2. 日時 2018年（平成30年）3月3日（土）（理事会終了後）：受付15:00～15:30、15:30～17:20
3. 会場 中央大学駿河台記念館 670号
4. 対象 日本学生陸上競技連合関係者（地区学連、加盟校等）
5. 定員 120名まで（テーブル3名掛け）
6. 司会 障子 恵氏（跡見学園女子大学、学生連合：総務委員長・指導者会議運営委員）
7. コーディネーター 船原 勝英氏（共同通信社、学生連合：指導者会議運営委員）
8. 演者（順不同）
 - （総轄）栗山佳也氏（大阪体育大学、学生連合：常任理事・強化委員長）
 - 安井年文氏（青山学院大学、学生連合：強化委員会、短距離・ハードル部）
 - 米田勝朗氏（名城大学、学生連合：強化委員会委員、中・長距離部）
 - 森長正樹氏（日本大学、学生連合：強化委員会委員、跳躍部）
 - 岡田雅次氏（国士舘大学、学生連合：強化委員会部長、投てき部）

以上

資料9 平成29年度指導者会議運営委員会

指導者会議運営委員会委員長	阿保雅行
委員	石井朗生
委員	障子 恵
委員	永井立子
委員	船原勝英
オブザーバー 学生前幹事長	飯塚啓子
学生幹事長	蔵並 香
学生副幹事長	宮崎芽衣
学生常任幹事	黒井文香
学生常任幹事	二見百香
事務局長	大西清司
注) 指導者会議運営委員会；平成28年度 新規設立	

資料10 平成29年度指導者会議運営委員会の開催報告

(平成29年4月～平成30年3月末)

月 日	委員会 (報告内容)	場 所
(平成29年)		
4月18日 (火)	第1回指導者会議運営委員会	日本学連事務所
5月19日 (金)	第2回指導者会議運営委員会	日本学連事務所
6月27日 (火)	第3回指導者会議運営委員会	日本学連事務所
7月24日 (月)	第4回指導者会議運営委員会	日本学連事務所
10月24日 (火)	第5回指導者会議運営委員会	日本学連事務所
11月21日 (火)	第6回指導者会議運営委員会	日本学連事務所
(平成30年)		
1月15日 (月)	第7回指導者会議運営委員会	日本学連事務所
2月20日 (火)	第8回指導者会議運営委員会	日本学連事務所
3月28日 (水)	第9回指導者会議運営委員会	日本学連事務所

資料11 平成29年度ユニバーシアード強化研究会の打ち合わせ

平成29年12月 3日 (日) 8名 (栗山・岡田・米田・障子・船原・阿保・蔵並・黒井)	日本学連事務所
平成30年 1月22日 (月) 3名 (森長・船原・阿保)	日本大学 (三軒茶屋キャンパス)
平成30年 1月23日 (火) 3名 (安井・船原・阿保)	青山学院大学 (青山キャンパス)

平成29年度ユニバーシアード強化研究会（第63回指導者会議）報告書

発行日 2018年（平成30年）3月31日
発行人 松本正之
編集人 永井 純
発行所 公益社団法人日本陸上競技連合
〒151-0053
東京都渋谷区代々木1-58-11 中沢ビル
電話 03-5304-5542
